
最強女子高生

魔の間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強女子高生

【Nコード】

N5945H

【作者名】

魔の間

【あらすじ】

崖っぷちな最強の女子高生の、周囲を巻き込んだ戦闘譚

第1部序章 私という人物（前書き）

以下の事を踏まえて、以後お読みください。

反社会的・暴力的シーンを含む

残酷描写あり

小説中で登場する団体は現実とは全く無関係です。

第1部序章 私という人物

私の名前は長島那美。ながしまなみ

名前も外見もごくごく普通な高校1年生。

普通じゃなかった過去を捨て、素行の悪い者達が集う事で有名な瀬戸際高校に所属している。

名の示す通りこの学校の生徒は、卒業生の就職率0・5%、大学合格率1%という瀬戸際に立つ。

しかし、それでも毎年100人は入学するというのだから驚きである。

どうやらこの学校は日本各地の悪童達から絶賛されているらしく、おそらくその所為もあつての人数なのだろう。

瀬戸際高校の生徒は、そのほとんどが夜中に活動を始めるという性質を持つ。

つまり車で爆走したり喧嘩したりする者達の集団が、この学校に巣食っているのだ。

もちろん、そこに女とか男とかいう区別はない。

そんな所に何故私みたいなのがいるのかというと・・・

「おい、隣町でまた狐面女こめんおんなが出たらしいぜ」

校舎前を陣取る茶髪の不良男が、隣にいる同種の男に話しかける。その言葉を聞いて、私は思わずギクリとする。

「マジかよ。今度は何人を病人送りにしたんだ？」

「相手は公園にいたらしいんだけどよ。」

どうにも喧嘩が強くて、排除しようにも誰にも出来ない様な性質の悪い輩だったらしくてさ。

その時相手は50人ほど居たらしいんだけど、全員地面とキスだつてよ」

「怖え〜な。」

最近じゃあ、日本中にシマ張ってる奴らが自分のチームに入れようと血眼になってその女搜してるらしいぜ」

「うわっ、マジかよ！」

俺のチーム入ってくんないかなーとか言っている不良の横を、私は静かに通り過ぎて教室へと向かう。

そう、私は裏界限ではかなり有名で、“狐面女”とかいう名で呼ばれている。

中学受験で成功して超難関中学校に入学したにも関わらずこの高校にくる事になった原因は、ここにある。

元々知能数が高かったからなのか何なのか、これといった努力もせずに出てしまう勉強に飽きた私は、夜中に暴れる事を覚えた。

純粹に喧嘩が楽しくて、暴れて暴れて・・・

最終的には警察に見つかって補導されてしまったが、私に悔いなどというモノはなかった。

成績は常に1位を取っていた為に所属中学校からのお咎めはほとんど無かったが、その代わりに付属の高校に行かない事を約束させられた。

将来の事などどうでも良かった私は、二つ返事でそれを承諾した。

そして、それからは狐の面を付けて暴れるようになった。
2回目に補導されたら退学だと言われたから・・・

で、今に至るといっわけである。

喧嘩する事自体に楽しみを見出していた昔とは違い、今は昼間とのギャップを楽しんでいる。

もちろん誰かの下につくなんて考えられなかったから、チームに勧誘してくる奴らは全て殴り倒してきた。

それでも勧誘してくる奴らがいるのは、きっとマゾっ気があるからだろう。

たった1人だけ、そんな私の正体を知っている人間がいる。

それは長島鎌ながしまれんという男で、私の兄だ。

完全に落ちこぼれた私と違って見事に東大現役合格を果たし、今では有名企業でエリートとして働いている。

兄さんは、私の唯一の理解者だ。

第1部序章 私という人物（後書き）

「ブログでは読みにくいっ！」という声にお答えして、ブログで元々連載していたのを引っ張ってきました。
楽しんで頂ければ幸いです。

—— 1章 危険物との出会い 1

この学校で、肩を5cmほど過ぎた黒髪を顔の両脇で三つ編みにしている那美は、非常に目立つ存在である。

他と一線を画したその真面目そうな容姿は、周囲の生徒にはとても近づきにくいものだった。

那美自身は気にも止めていないが、この学校で彼女の友人と呼べるような者は1人としていない。

皆、遠巻きに彼女を観察するのみである。

しかしそれは生徒に限った事で、逆に教職員はこぞって、御し易そうな彼女を雑用に使おうとした。

・・・が、実際に彼らがそれを実行した事はない。

なぜなら彼女の睨みが、無言の内に教師達の要望を退けるからである。

「席につけ。授業始めるぞ」

教師がいつもの様に教室に入ってくる。

普通、どの学校でも教師が入ってくるまで教室内は喧騒に満ちているものだが、ここではそんな事はない。

授業を受ける様な物好きが5人も居ないからである。

たとえ来ていたとしても、寝ているだけという者がほとんどという状態である。

そんな物好きの内の1人、片山類かたやま いるいがまだ授業も始まっていない内から手を上げた。

「はい、せんせー！」

「どうした？」

「昨日やった範囲がまだよく分かりませーん」

「昨日やった範囲って・・・確かその前の時間もやらなかったか？」

「それでも分かりませんでしたー」

「……………俺の教え方が悪いのか、お前の理解力が足りないのか……………自信が失せてきた」

教師が頭を抱えて唸りだす。

片山はそれを見て、那美の方にちらりと視線を送った。

「あ……………じゃあ先生、別にいいです。長島さんに教えて貰いますから」

「……………そうだな。長島、頼む」

教師の視線を受けて、那美はちらりと片山を見る。

片山は薄っすらと笑みを浮かべて、彼女の方を見ていた。

それは明らかに格下を見る様な、優越感たっぷりの表情である。

「分かりました」

しぶしぶといった感じで那美は頷く。

片山は茶色に染めた短髪に黒目という、この学校では珍しくない容姿を持ち、片耳に3つ程ピアスを付けている。

体系はどちらかと言えば痩せ型で、何故か性別関係なくモテる。

そして、彼は学校を中心とした地域で活動する不良集団を統括するリーダーという顔も持つ。

片山がリーダーを受け継いだから急成長を続ける『龍神』というチームは、この辺りでは有名すぎるほど有名だ。

授業が終わると、片山は立ち上がり、那美の席に近づいてきた。

「長島さんだよね？」

那美は片山を見上げる。

「何ですか？・・・あ、教えるんですけど？」

「そうそう宜しくね。」

俺、頭悪くってさ」

片山はガリガリと頭を掻く。

「何処ですか？」

「えっと、この問題なんだけど・・・」

那美はノートに書いて説明を始める。

“(2x - 3y)〔2乗〕”

「これですよね」

「そう、それぞれ」

「これは・・・」

“|| 4x〔2乗〕 - 12xy + 9y〔2乗〕”

「こうなります。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・？」

あれ？分からないですか？」

「……いや、ていうか、途中式とか普通あるんじゃないの？」

「私の中には存在しないので、よく分かりません」

「……」

片山が黙ってしまふ。

那美は暇になり、教室の窓から外を眺めた。

「頭いいんだな。何でお前みたいな奴がこんな所にいるんだ？」

片山は心底不思議そうに首を捻る。

微妙に呼び方が変化しているのに気が付くが、いちいち指摘するのも面倒だった那美は、その事について何も言わなかった。

「ふふつ。いろいろ事情があるんですよ」

那美は笑みを浮かべて、はぐらかした。

その態度を見て、片山は眉間に皺を寄せただけで特に言及する事はなかった。

「ふうん」

「片山君は？」

「俺は……ほら、分かるだろ？」

片山は自嘲気味に笑んで、自分の頭を人差し指で指し示す。
それが何を意味するのかが分かり、ああと那美は素直に頷く。
すると片山はぷつと吹き出す。

「お前、おもしろーな。……てか“片山君”やめろ。
そんなガラじゃねー。類って呼べ。」

あと敬語も要らねえ」

「分かった」

「その代わり、お前の事も那美って呼ばせてもらっぜ？」

那美は目を見開く。

「……類こそ、珍物だわ」

「はあ？」

「私の事を名前で呼ぼつとするなんて」

「……お前つて、可哀想な奴だったんだな」

「哀れみの籠もった目線で見ないでくれる？」

むすつとして那美が言つと、またもや類は笑い出す。

「あははは！お前やっぱりおもしれー！

何かあったら言えよ。俺が何とかしてやるから」

じゃあな、と言つて類は教室から出て行つた。

よく笑う人だったんだなとどうでもいい感想を抱きつつ、那美は鞆から本を出して読み始める。

危険物との出会い2

その日の夜10時――

子供は寝る時間、と叱っている母親の声が聞こえてくる頃
ほとんどの家族が自分の家に集う頃

そんな時間に那美の時間は動き出す。

いいカモフラージュになると兄がどこぞからか持ってきた巫女服を
纏い

水で簡単に落せるスプレーで、髪を金色に染めて
黒い細い線で描かれた目と鼻、赤い線で描かれた口と髭の狐面を顔
につけ

那美はこっそりと自分の家を出る。

その姿は月光に照らされて夜道に浮かび上がり、まるで本物の狐の
ように見えた。

「さて、今日はどこへ行こうかな？」

そう小さく呟きつつも、那美の足は止まらない。

那美の家は、学校のある町の隣町にある。

先日那美の家から20分くらいの場所にある公園で不良集団が、限
度を超えた騒ぎ方をしていたので全て叩き倒した。

それが朝の不良達の会話に上ったというわけである。

那美は聖人君子でもないが残虐非道でもないので、理由のない時は
暴れないことにしている。

「うーん・・・学校には近づかない方が身の為かな」

那美は1人でうんうん頷き、家を挟んで学校とは逆側にある川へと向かう。

川の土手は夜、不良達の集会場としてよく使用される。

今日もそこには数十人の者達が土手に集っている。

那美はそれを気配を絶って、物陰から見つめる。

「おーい！良く聞けえっ！今日はあの龍の野郎共を狩りに行くぜえ！」

1人の男が集団と向き合う形で大声を張り上げる。

おそらくその男がリーダーなのだろう。

彼と向き合っている集団は、男を煽^{あお}るように罵声を響かせる。

「龍の野郎共・・・龍神？」

それは、類が率いるチームで・・・

手助けをしてやるつもりはないが顛末を確認しよう、と那美は頭の中で即決した。

龍神というチームが、類という人間が、どれだけ強いのか興味があった。

那美にとって、目の前の集団は単なる雑魚^{しちやう}に過ぎない。しかし類は彼らをどう見るのか——それが気になった。

ふと集団からリーダーの下へと歩み寄る者がいた。

・・・女だ。

背中半ばくらいまでの長さの緩く巻かれた茶髪に黒目の女は、笑みを浮かべていた。

その笑みは、男なら誰しも骨抜きにさせてみせるという確固たる自信に満ち溢れていた。

それを見た那美の目に剣呑な光が浮かぶも、もちろん気付いた者はいない。

リーダーの男は傍に来た女の肩を抱き寄せて、集団に向かって号令をかけた。

「行くぞっ！」

そろそろ学校に向かい始める集団の後を、気配を消したまま那美は追う。

学校まで30分もかかるのにわざわざ歩いていくなんて努力家だと、どうでもいい事を思いつつ那美は黙々と歩いた。

・・・筋肉を鍛える為の手段なのだろうか？

「おらあっ！！！！出て来いやっ！龍野郎！！！」

学校の校門に着くなり、大声で相手を挑発するリーダー。

どちらかといえば単独行動を好む那美は、そんなリーダーの行動を幼稚とは思えなかった。

彼らの負けは決まったわね、と半ば確信に近い思いを那美は抱く。

やっぱり雑魚だと断じた那美は、ガラリと雰囲気の変わった夜の学校に興味を移す。

「それともビビツちまったか？ああん？」

集団の中の1人が、リーダーに続いて声を荒げた。

すると、その声に応じる様に校舎の玄関がギィッと不吉な音を立てて開いた。

中からぞろぞろと出てきたのは、学校でよく見かける学ランを着た者達だった。

そしてそれらの者の中心を裂くようにして、他の者とは確実に一線を画した雰囲気を持つ5名の男達が正面に出てきた。

モーセも海を渡った時はこんな感じだったのかな、と那美は思った。

周りに頭を下げられているその5名の中心に類は居た。

おそらく周りの4名は幹部か何かだろう。

今の類の顔に昼間の生徒らしい笑顔など、微塵も見られない。

「ほう？古狸が何の用だ？」

類は校門近くにたむろする集団を見て、馬鹿にしたような冷たい笑みを浮かべる。

「今度こそお前を殺ろうと思ってな」

「へえ？」

古狸と呼ばれた集団のリーダーの発言に、龍神の不良達は顔に嘲笑を浮かべた。

「ま、相手してやるか」

ちよつとそこらへん散歩してくるわ、とでもいつかのように軽々しく類は言う。

「えーこんなの相手にするのぉ？」

類の右横に立つ、可愛らしい容姿をした背の低い男が不満そうに声を上げた。

「じゃ、別にお前は参加しないでいいぞ。

俺と他3人でいくから」

「っ！な！なめるな！

30人はいる俺達を4人でだど？！！」

類の発言に、侮られたと感じた男はこめかみに血管を浮かべて仲間をけしかける。

「俺達の力を見せてやれ！」

リーダーを先頭に、古狸集団は総攻撃をかけていく。

対し、類と他の幹部3人はゆるやかな歩みで古狸集団に近づき、彼らを迎え撃った。

笑みを崩さずに余裕を保ちつつ、4人は次々に相手を地に伏せていく。

結局、古狸集団は4人の体に満足に触れる事すら敵わず、意識を飛ばしていった。

そして最後に1人、リーダーが残る。

倒れ付した男達を中心に5人は立っている。
リーダーと類は相対する。

「俺達の力を見せてやれ？」

類が冷たく笑って復唱すると、相手の男は苦虫を潰したみたいな顔をした。

「じゃーねー！」

軽い別れ言葉を口にする、類は一気に男の前まで駆けつけた。
そして相手の顔面に拳をお見舞いして男を気絶させ、古狸集団との喧嘩を終わらせた。

「はんっ！腕試しにもならねえ！」

類は馬鹿にしたように笑って踵を返す。
幹部を引き連れて校舎に戻ろうとしたが、自分と呼ぶ声に足を止める。

類が振り返った先には、いつの間に戻ってきたのかリーダーの女があの妖艶な笑みを浮かべて立っていた。

「何だ、女」

「私、強い男好きなのよ。」

ねえ、私を貴方の女にしてくださいさらない？」

類は面白く無さそうに女を見て、吐き捨てる様に言う。

「馬鹿じゃね？」

俺、お前みたいな女嫌いだし」

一瞬悔しそうに顔を歪めるも、女は諦めなかった。

校舎に戻ろうとしている類に再び媚びた様な笑みを浮かべて近づこうとする。

が、それはあえなく失敗した。

那美が彼女の顔を思いつきり殴りつけたからである。

殴る音で、龍神のメンバー達は驚愕の表情と共に振り返る。

振り返った顔には“今まで気配を感じなかったのに”と書かれてある。

那美はそれらをさっくりと無視して、気絶した女の頬を叩いて起こす。

「狐面女……」

類が小さく呟いた。

「初めて見たねー？」

類に続いて、あの可愛い男が言う。

「……う」

龍神の集団が絶句して見守る中、小さく呻いて薄目を開けた女を那美は面をつけたまま見つめる。

女は那美を認識すると、いきなり叫び出した。

「何よ！あんた、女っ？！
私に触るんじゃないわよ！」

那美は僅かに首を傾げ、それに冷たく返す。

「久しぶりね。麗華^{れいか}。元気だった？」

那美の声を聞いて、ビクツと相手の女―麗華は体を振るわせた。

「あああああ、あんた・・・那美っ？！」

その叫びに一番反応したのは類だった。

しまったなと那美は少し後悔するも、時既に遅し。

「那美？！！狐面女が那美？！！」
「知ってるんですかイ？」

類の驚愕の表情を見て、幹部の1人が変な発音で声をかけた。

那美は麗華から視線を外して、類の方を見やる。

「・・・那美なのか？」

類が恐る恐るといった感じで声をかけてくる。

那美は小さく息を吐いて、麗華から手を離す代わりに足で彼女の腹

を踏みつける。

麗華が顔に苦悶の表情を浮かべたが、那美はそれを見もせずにつけている狐面を外した。

「こんばんは、類」

につこりと笑って那美は言った。

危険物との出会い3

夢でも見ているのだろうか？

それでも目の前に曝^{ひら}された顔は、間違いなく今日知り合ったばかりのクラスメイトで。

那美という女は前々から、瀬戸際高校ではかなり有名な人物だった。入学してくる連中はどいつもこいつも、何かの妄執に取り付かれたかのように皆金髪か茶髪に染めている。

そんな中で逆に目立っていた彼女の黒髪。しかも、いつの時代の優等生だというのが、それを左右で三つ編みに結っている。

見た目が完全に真面目っ子である彼女は、頭の軽いこの学校の生徒から敬遠された存在だった。

今日の昼の授業で質問の相手に指名したのは、類の単なる気まぐれに過ぎなかった。

でも話すと意外に面白かったし、これからはクラスメイトとして気軽に話す相手になるのであらうと思っていた。

その彼女が……狐面女？

「うそだろ・・・」

類は思わず呟いた。

那美は、そんな彼を見て面白そうに笑った。

「獲物取ってごめんね？ちょっとコイツには借りがあって」
「借りってなあに？」

もしかして君が狐面女として動いているのはその為？」

類の横に居た可愛らしい男が首を傾げて問う。

「・・・そんな貴方は誰？」

「あ、僕は北村省吾^{きたむらせいこ}。省吾って呼んで。
・・・那美ちゃんていいのかな？」

「那美です。さっきの問いですけど、秘密にしておきます」

にこりと笑って那美が言う。

「えー」

「で、この女ちよつと借りていい？」

まるで隣の席の人に忘れ物を借りるかのように、淡々と那美が聞いた。

「・・・あ、ああ」

省吾と那美の両方に見つめられて、類はようやく返事を返した。
その返事聞いて、那美は足の下に引いている麗華とかいう女に視線

を戻す。

麗華を見る彼女の顔には、危険な微笑みが浮かんでいる。

「・・・ひいいいっ!!」

追い詰められた麗華が、掠れた小さな悲鳴を上げた。

その顔の右半分は那美に殴られた所為か腫れ上がっていて醜く歪んでいる。

元の美貌が台無しだった。

それを嘲る様に目を細めて見下ろし、那美は低い声で言う。

「私がやられたのは、こんなものじゃなかったよ？」

麗華の体が、その言葉にびくつと震える。

那美はぐつと彼女に顔を近づけて低くのたまう。

「聞け。このままこつちの世界から足を洗うか、病院送りか、選べ」

がくがくと麗華の体が震えている。

那美から発せられる殺気だけでも窒息死させられそうな程、恐ろしいからだ。

「選べ」

語気を強めて言うと、麗華が涙目で小さく言葉を洩らし始める。

「うあ・・・洗うからあ・・・洗うから、許してえ」

それを聞いて、那美は足を麗華の上から退ける。

「分かっているだろうけど、次にお前を見つけたら・・・ね？」

那美のその言葉を聞くと同時に、麗華は逃走した。

彼女の姿が見えなくなると、那美は再び狐面を顔に付ける。

そしてこちらに向き直り、綺麗な所作で一礼をした。

「ご迷惑をおかけしました」

籠もった声でそう言って、那美はその場を立ち去ろうと踵を返す。

「ねえっ！僕らのチームに入らない？」

省吾が那美に声を掛ける。

その言葉に彼女は足を止める。

「私は仲間というものを信じられません。

貴方達が信じられる様な人達であると分かった時、私は惜しむことなく龍神に入りましょう」

那美は類達に背中を向けたまま、そう言う。

彼女の言葉は淡々としていて、まるでそんな日は一生来ないと言っているようなものだった。

そして運悪く、その言葉は類の心に火を灯らせた。

「・・・やってやろうじゃねえか。
もし、俺達がどれだけ信頼できるかを那美に見せる事が出来たら、
お前はこのチームに入るんだな？」

類の言葉に、那美は小さく頷いた。

「お約束しましょう」

背筋を伸ばして歩く彼女の後姿が見えなくなるまで、類達はその場に立っていた。

「彼女、相当強いよ」

「ああ。那美が入れば、ここら一帯は一瞬で制圧できるだろうな」

省吾の言葉に類が答える。

それだけで、龍神のチーム全員が次の目標を見定めた。

「もしかしたら、俺ら以上かも・・・な？」

「ふふ。楽しみだなあ」

省吾が珍しく、本当に楽しそうに笑っている。

「そついえば・・・」

類が、ふと思い出したように呟いた。

「そついえば？」

「なんで巫女服なんだ？」

- 危険物との出会い③（後書き）

次話から量がドンと増えます。

—— 2章 正体が掴めない 1

彼女の正体を知った次の日——

毎朝8時に登校する那美は、その日に限って授業が始まっても現れなかった。

これはおそらく、狐面女の正体が彼女であると知られてしまった事が原因だろう。

……そんな類の想像に反し、彼女は昼休みになって現れた。

どうやら単に遅刻しただけらしい。

予想を簡単に覆されて苛立っていた類は、普通正体がバレたら姿をくramsるのが常套手段じょうそうしゅだんだろうと彼女に八つ当たり気味に突っ込む。その言葉に那美は冷たい目線と共に、夢を見すぎじゃないのと返してきた。

金払ってもらってこの学校に来てるというのに、安易に学校変えられる訳ないでしょうと真面目に言われ、類は少し困った。

じゃあ遅刻はいいのかとも思うが、そこを聞くと反応が怖いのでやめておく。

「この学校の奴らってほとんどが龍一族だから、お前これから相当やりにくいと思うぞ?」

代わりにそう言うと、彼女は微笑んでこう言った。

「やりにくい？それって、どうやりにくいの？」

那美の背後から黒い何かが立ち上っているのは気のせいだろうか、類は目をこする。

お前アタマだろ。何とかしろや、ゴラツというお達しだろうか？冷や汗を背中に掻きつつ、那美の視線から逃れる様にして類は教室を見渡し、ふとある事に気がつく。

・・・いつもほとんど人のいない教室に、何故か今日に限ってたくさんの人が居る。

そう思うのは気のせいだろうか、と類の視線を追って教室を見渡した那美も思う。

見る限りだが、教室の席数以上に人がいる様な・・・
那美は首を傾げる。

彼女の行動と表情とを見て、類が苦笑いをする。

「見られているな」

誰が？・・・主語がないから分からない。

私はいつもの様にきつちりと髪を三つ編みにしているし、目の前にいる類だって変わらず茶色の短髪だ。

考えていると、驚いている様な類の声が耳に響いた。

「おいおい気付けよ。お前、見られてるぜ？」

・・・私？

「何で？」

「何でじゃなくてっ！那美が狐だったからだろうが！」

・・・きつね

・・・狐

・・・狐面女？

「ああ！」

「ああ、じゃねーだろ。気付けよ。」

ガクツと類が頂垂れる。

「って、何でここまで広まってるの？」

「だからさつき、この学校の奴らの多くが龍一族なんだつつただろ？」

昨日はほとんどの奴が学校に来てたんだよ」

類はそう言っただけ息を吐く。

「そつえば、さつき聞いたね」

「ああそつだな」

コイツと話していると無駄に氣力を消費するのは気のせいか、と類は思う。

「半端なく強いくせに、何でそういう所は抜けてるんだ？」

「何でだろうね？」

「・・・で、どうやったらお前から信用を勝ち取れるんだ？」

類が居住まいを正したのを見て、那美も従う。
真剣な表情の類に対し、那美は隙の無い微笑みを浮かべる。

「さあ？今まで私の信頼を勝ち得ようとした者なんて居なかったから分らないよ」
「うそつけ」

教室がシンと静まり返っている。
おそらく類と那美の会話を、耳をそばだてて聞いているのだろう。それで関心の度合いが分かるというものだ。

「嘘なんかじゃないよ？」
くすくすと那美が笑う。

……コイツ、誰かに似ている。

類是那美の言動を見て、思う。

「ちよつとずつ調べているんでしょ？私の事」

類はチラリと那美を見やる。

「当たり前だ。素性の知れない奴を引き込んで、チームを破壊させるわけにはいかないからな」
「立派ね」

那美は意味ありげに笑む。

おそらく類が、彼女の情報を1つたりとて得る事が出来ていない事を知っているのだろう。

多くの人員を投じて何日も探しているのに何も見つからないなど、龍神にとって初めての事だった。

そのせいで情報収集員は苛立っていた。

本人を拷問して吐かせようと画策するまでに。

もちろん俺が止める間もなく、どこからかその不穏な行動を嗅ぎ取った“本人”の手によって計画は握り潰されたのだが・・・

あれだけ優秀な仕事をしてきた奴らが簡単に病院送りにされてしまった事は、類にとって頭の痛い問題になっていた。

「・・・たく、お前はどこから情報を仕入れてるんだよ。アタマの俺に届く前に気付くなんて意味不明だ」

類は舌打ちしつつ、那美を見やる。

「私にはとても心強い味方がいるから」

彼女はさらりと俺の問いをかわす。

味方って誰だと問う間も無く、那美はいきなり立ち上がる。

「うおっ！どうした?！」

びっくりして類は思わず背を反らせる。

「・・・忘れてた」

哑然とした表情で那美は立ち上がったまま呟いた。

教室にいた奴らが、何事かっ！！という風に周りを警戒している。それをあつさりと無視して、那美はダッシュで教室を去っていった。その姿はまさに風の如し。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ってオイっ！！」

お前、今来たばっかだろ！！」

類のつつこみは当然、那美の耳には届いていなかった。

「くすくす・・・・那美ちゃんって面白い子だね？」

いつの間にか類の前の席を占拠している省吾が楽しそうに言った。

「明らかに俺の負担が増えただけのような気もするがな」

類は舌打ちをして、椅子に逆向きで座る省吾を睨む。

「そんな風に取り乱してる類も見ていて楽しい」
「・・・・・・・・・・オイ」

眼光を強めて省吾を睨む。

「そういえば昨日皆で話してたんだけどね？」

その言葉を気に省吾の雰囲気ガラリと変わる。
このホワホワとした“お姉さんが守ってあげる”といった感じの脆弱そうな美少年は、意識しただけで百戦錬磨の策士となる。

もつとも今の彼が本当の彼なのだが、外見的にはあの身長の低さと童顔さがどうしても目立ってしまう。

そんな表面的要素に騙される奴は多く、龍神ではその外見を生かして類の護衛を担っている。

類の机を囲むように、龍神の幹部――四龍しりゅうと呼ばれる者達が現れた。

教室に居る者達のキラキラした憧れの視線を感じるも、決して誰も近づいて来ようとはしない。

それは彼らが持つ圧倒的な威圧感の所為である。

「静ちゃん、類に報告♪」

省吾が隣に立つ筋骨隆々な黒髪ドレッドヘアの男に語りかける。

彼は綾崎静あやさきしずか、龍神では特攻隊長的役割を担っている。

名前の可愛さに反して外見は大層いかつい。

身長は190cm以上もあり、肌は日焼けで茶色い。

暑いのか冬でも薄着で袖すそをまくり、そこからムキムキな筋肉質な腕がよきつと生えている。

立っているだけで誰かを気絶させてしまいそうな男だ。

「昨日話し合つて、狐面女は類に一任する事にした」

釣りあがった目を類に向け、厳かな口調で静が言う。

「……………つて、はあ?!」

類が素つ頓狂な声を上げた。

「俺らじゃ絶対敵わないしナ！」

語尾の発音を明らかに間違えている声が、類の隣から聞こえる。肩を越す位の茶髪の上半分を一つに括った軽そうな男がそこにはいた。

口にはいつもニヤリとした笑みを貼り付け、目には相手を馬鹿にした様な光を浮かべている。

身長は類と同じ位な彼の名は飯塚明治、いづかあきはる龍神の援護担当だ。

「丸投げとか・・・覚えてろよ」

類は笑みを浮かべつつ、辺りに殺気を放つ。

「仕方ないでしょ？類でも勝てなさそうな強敵が、僕らに敵うはずないし」

それを見て、また笑い出す省吾。

対し、無言で頷いているのは銆蒼海里。もりぶきかいり

ボサボサとした天然パーマの茶髪で前髪は長く、黒縁眼鏡をしている。

常に何を考えているのか分からないポーカーフエースで、龍神では戦略や策略などの知略を担当している。

彼が必要な時以外で言葉を発することはなく、ほとんどを聞き役に回っている。

「海里もかよ・・・」

類はがつくりと脱力する。

「俺、女のケツ追っかけるより、追われる方が好きなんだがなあ」

そして何気に破廉恥な事をぬかす。

「ははっ！頼んだぜ？天竜さん？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・お前らこっという時にしか、その言葉使わねえよな」

龍神のアタマは天竜という二つ名があつたりするも、普段誰も使う事のない非常に使用頻度の低い語である。

ともすれば本人すら忘れてしまっていたり・・・・

「さっきも仲良く話していたみたいだしね？」

省吾が意味ありげな目線を寄越す。

「攻略方法の模索してただけだ」

「ふーん？」

省吾がニヤニヤしている。

・・・・・・・・やばい。完全に俺、遊ばれてる？

類が一睨みすると、省吾は怖い怖いと全く気持ちの籠もっていない言葉を並べ、教室を去っていった。

それに続いて3人とも出て行く。

前途多難だな、と残された類は深いため息を吐いた。

―― 正体が掴めない2

相手の事が知りたい。

・・・となつたらやる事は何だろう？

考えに考えた結果、思いついたのは尾行という手段だった。

絵に描いた様な、白マスク・グラサン・ニット帽着用という姿で、類は現在進行形で尾行中である。

周囲から見ればその格好はかなり怪しく、女子高校生を追い回すストーカーにしか見えずに衆目を集めているのだが、那美の動向に集中している類は気付かない。

ただ一流のストーカーよろしく目の前を悠々と歩いている那美を、つかず離れず黙々と追うのみである。

ふと、ズボンのポケットで携帯が震えているのに気が付く。類は立ち止まり、舌打ちして携帯を出す。

携帯の着信画面には明治の名前が表示されていた。

・・・電話だ。

通話ボタンを押して、携帯を耳へと持つていく。

「どうした？」

『ちよつと大変な事が起こっているみたい』

全く焦っている様子のない声で淡々と言われ、類は逆に焦った。

「い、一体何があった？」

『今日の夜、いつもの場所で話すヨ』

「・・・緊急事態じゃないのか？」

『確かにヤバイ状態なんだけど、携帯で話すのは面倒なんだよネ』

「・・・分かった。夜に」

『夜に』

携帯からツーツツという無機質な電子音が流れる。

類は深いため息を吐きつつ、それをまたポケットにしまった。

普通表立って動くことのない明治からの知らせという点から考えても、相当ヤバイ状態のはずなのだが・・・

それを面倒の一言で片付けてしまう奴は凄い。

・・・って、ん？

何か忘れてないか？

はたと思い留まり、類は今まで自分が何をしていたのか考える。
そして・・・

「あーーーーー!!!!!!」

絶叫して再び衆目を集めるも、既に目的の人物は見えず。
類の尾行は本人の油断によってあえなく失敗とあいなった。

――夜

いつものように類は学校へと向かう。

夕方の失敗を精神的にまだ引っぱりつつも、止まらずに歩く。学校に着くと、大声で名前を呼ばれた。

「類っ！」

省吾がにこやかな表情でこちらに駆けて来る。

「おう、なんかヤバイ事になってんだって？」

類の言葉に省吾は一瞬笑顔を消し、小さく頷いた。

「そうか。じゃ、ちょっとから幹部会始めますか」

ニヤリと笑う顔を見て、省吾は内心安堵する。

本気で大変な状況なんだけど……ま、アタマは能天気な位が丁度いい。

……などと、何気に失礼な事を思われていたりする類だった。

「で？何があつた？」

教室の一室に幹部が揃うなり、類が明治の方を見て切り出す。

「最初は些細な事だつたんだヨ？」

龍一族の下っ端が暴力団の下っ端に絡まれて、仕方なく返り討ちに
しただけなの二・・・

でもそれに向こうの上層部はよく思わなかったみたいで、昨日と今
日で立て続けにこっちの奴らを20人ほど病院送りにしてきタ。
ちなみに、これが相手暴力団のボス」

明治が渡してきた紙を見て、類は眉間に皺を寄せる。

「つーかコレって逆恨みだろ」

「そうともいいうネ」

「・・・強えのか？」

「そついえば襲われた者の半数の体に銃創が残つてたヨ」

「銃だと？！レベルが違いすぎるじゃねえかつ！

拳じゃ敵うはずもねえ！」

「そつ、だから大変なんだよ」

最後に付け加える様にして、省吾が言った。

「しかし、このままやられ続ける訳にはいかん」

静が両拳を膝の上で握り締めて言い切った。

おそらく襲われた奴らの中に、静と縁の深い奴でもいたのだろう。

類はその言葉に頷いて苦々しく呟く。

「何か方法は無いのか？」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

一同の間に沈黙が流れる。

ずり・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・何か方法はっ！」

だんつと机を手で叩いて、類は必死に考える。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

ずりずり・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・ね、何か聞こえない？」

省吾が沈黙を破る。

ずりずりずりずり・・・・・・・・

「本当だナ」

「俺にも聞こえた」

ずり・・・

音はどうやら廊下から聞こえてくるらしい。

何だ？敵か？

そう類が思案を巡らせていると、ガラガラと教室のドアが開く音がした。

一同はハツとしてドアの方に視線を向ける。

・・・——そこにいたのは

「ちす」

軽く片手を上げた那美が立っていた。
いつもの狐面は外して、手に持っている。

「お前か・・・」

「何かな？その残念そうな顔は？」

類が呆れ顔で言った発言に対し、那美は黒い笑顔で聞く。
ひくりと顔を引き攣らせた類から視線を逸らして、那美は教室を見回した。

「へー。夜になるとこんな風になるのか。」

実際に見てみないと分からないもんだねー」

何しに来たのかという視線の中、どうでもいい事に那美は感心して
呟く。

「那美ちゃん、どうやってここへ？」

一向に切り出そうとしない本人に焦れた省吾が笑顔で聞くと、那美
もパツと笑顔を散らす。

よくぞ聞いてくれましたっ！と言わんばかりだ。

そして誇るように胸を張りつつ、元気よく返答する。

「脅したら入れた！」

・・・しーん

那美の発言に一同黙り込む。

「徹底した再教育を行う必要があるそうだ」

「そうみたいだね」

「でも、俺もアレは無理かな？」

どこか遠くを見ている様な目で会話する類と省吾に、明治は現実的
な言葉でトドメを刺す。

静がその横で何度も頷いている。

「で？お前は何しに来た？」

いち早く現世に戻ってきた類が聞く。

「あ、忘れてた。コレコレ」

と言って、自分の足元を指す。

「「「「「？」「」「」」」」

疑問を解決する為に、5人は席を立ち上がる。
そしてその光景を見て、一瞬にして固まる。

「何か龍がどうたらこうたらってわめいてたから、吐かせてみたら・
・・
とんでもない事になってたみたいねー」

あっけらかんとした表情で那美は言う。

那美の足元で、血だらけで伏しているのは間違いなく今さっき明治
から渡された紙に印刷されていた顔の男そのもので・・・

「・・・・・はあ?!」

類が素っ頓狂な声を上げる。

「いや、待て待て!!意味分かんねえ!!」

「・・・・・?」

「いや、もっかい言うけど・・・はあ?!」

突然大声で叫びだした類を、まるで未確認生命物体でも見つけたか
のような表情で那美は見る。

・・・頭、大丈夫かな？

逆に心配になった那美であつた。

ちなみに、他の幹部達は一様に首を振っている。

どうやら目の前の光景を認識する事を脳が拒否しているらしい。

「何に驚いているのか、私には理解できないけど・・・とりあえず用件は済ませるね」

哀れみの目線を一同に寄越した那美は、足元の男を小突く。

「起きろ」

さつきまでとは全く違う、地を這う様な声音で那美は言った。

男はびくりと体を震わせて目覚めると、那美を見て絶叫した。

類にはその気持ち痛みが痛いほどよく分かった。

軽く同情して、餌食と化している男を見やる。

「うああああ！！！！すいませんすいませんすいませんぎゃっ！！！！」

那美は謝り続ける男の前髪を掴んで、無理やり顔を上向かせる。

「誰に謝ってる？」

笑顔で那美がそう聞くと、男は恐怖のあまり再び絶叫する。

「うるさいなあ。・・・で？誰に謝ってるの？」

「・・・う、うあ・・・うああっ・・・りっ」

ポタポタと男の目から涙が落ちる。

「り？」

「龍神にですうああああぐふっ」

言っやいなや、那美は男の腹を蹴って意識を落させる。

那美が髪を掴んでいた手を離すと、ずべしゃつと力なく男はうつ伏せで床に転がる。

男と対峙していた時とは別次元の笑顔で呆然とする一同に向き直る。

「……っというわけ」

にこにこする那美とは対照的に男達の顔は青い。

「良かったねー。たまたま私が崩したから良かったようなものの」

クスリと那美は笑った。

「……ね？」

「ああ、余計な気を使わせたみたいだな」

類が引き攣った顔で言うと、那美は悲しそうな笑みを浮かべた。その笑みは那美を儚げに見せる。

「いいえ。私はただ……」

「ただ？」

類が聞き返すと、ハッとして元の笑顔に戻った。

「じゃっ」

そう言つて、那美は男を引きずりつつ教室を出て行つた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・とんでもない人ですネ」

明治が掠れた声で言う。

「まさか一人で、か？」

「そうだろうな」

静の問いに類は頷く。

狐面女に仲間がいるなど聞いた事が無い。

ふと、省吾がしゃがみ込んでいるのに気が付く。

「省吾？」

「類、これ見て」

類は省吾が見ている辺りを見る。

「・・・・・・・・これ」

省吾のその後の言葉を聞いてハッとする。

類は急いで那美の後を追つた。

“こっちはね、引きずられた血の跡だから男のものだと思うんだ。
でもこっちは・・・・”

血の後は2つあった。

長く伸びた跡と、点々とした跡・・・

それは間違いなく

「那美！」

あいつは間違いなく生身の人間なんだっ！

なのに！

何であんな無茶を！

っーか言えよ！！

・・・廊下で座り込んでいる人影が見えた。

- 正体が掴めない2（後書き）

（12・9・2009）——改訂完了（

―― 正体が掴めない3

絶句するというのは、こういう状況に使うものなのかもしれない。

それぐらい、類達はその光景を見て立ち尽くしていた。

そんな状況になる数十分前

真つ青な顔をして気絶している那美を横抱きにして類は教室に戻ってきた。

それを見た明治は、廊下に気絶したままで転がっていた暴力団のボスを迎えに行き

省吾は類の腕の中で死んだようにして眠る那美を覗き込み
静と海里は唯一ベッドがある保健室へと走っていった。

「那美ちゃん、大丈夫かなあ？」

三人になった教室で、省吾が言う。

珍しく心の籠もった心配そうな声で。

「とりあえず、保健室だ」

類は難しい顔をし、那美を揺らさない様に最新の注意を払って歩き始める。

「そうだね」

省吾が類の横に付き添う。

それから無言で二人は歩く。

「……ん」

保健室の引き戸に類が手を掛けた時、那美が目覚めます。

類はそれに気付くも、そのまま保健室へと入った。

中には既に、静と海里によって整えられたベッドが鎮座していて類はそこへ那美を静かに降ろした。

「ん？何これ？今どういう状況？」

混乱しているのか、那美がキョトキョトと目を左右に動かす。

そして体を起こそうとするも、痛みが走ったのか顔を顰めて動きを止める。

それを見かねたのか、海里が手助けしてようやく上半身が上がる。

「あ、ありがとう」

那美は驚きつつも、海里に向けて軽く頭を下げる。

「……ちっ」

舌打ちをして、類が那美の頭を平手で叩く。

音は派手になったが、もちろん手加減はしている。

「痛った！」

通常的那美ならば、軽く避けて終わりなのだが
そこは本調子ではない事が影響しているのだろう。
叩かれた那美は、非難の目を類に向ける。
類はその視線を、顔を背けることによって交わす。
後が怖い、これ位しなければこちらの気が収まらない。
そんな類の心境を察してか、代わりに省吾が言う。

「そこまでするなんて、呆れるよ」

類の方に向けていた目を省吾に向けて
そして那美はきょとんと相手を見返した。

「そこまでつてどこまで？」

はあ？という空気が辺りを包んだ。

「……お前は何故自分の命を危険に晒してまで狐面女を続ける
？」

静が厳かな口調で聞く。

そこには、何人たりとも嘘など吐く事のできない迫力があつた。

が、しかし那美は

「単なる意地」

と軽く言って、笑った。

「前に麗華とかいう女を脅していた事と何か関係があるのか？」
「教えない」

類の問いを那美は笑ってかわす。

その食えない態度に類は再び舌打ちをする。

―と、そこに

「忘れ物取って来たヨ」

明治が例のボスを引きずって、保健室にやってくる。

鼻歌を歌いつつ引きずってきた男をベッドの脚に括り付けている様
は、

必要以上に生き生きとしている。

そういえば明治は人の弱点に塩を塗るのが好きだったな、と類はど
うでもいい事を思い出す。

明治は男を拘束した後、軽い足取りでこちらへとやってきて

那美にニコリと無駄に明るい笑みを向けて言う。

「那美さんだよネ？」

飯塚明治っていいます。宜しくネ？」

明治の差し出した手を那美はしばし不思議そうに眺め、そろそろと
同じように手を差し出す。

那美の遠慮がちな手を強引に掴み、一方的に握手する。

「何これ？」

那美が困ったように首を傾げている。

「……………え？何って、普通に握手だよ？」

省吾は、ん？と同じように首を傾げる。

「……………初めてした」

あーびつくりしたーっ！と、離れた手を見つつ那美が言う。
それを聞いて、また周りの空気が固まる。

世間知らずにも程があるだろ！と、男達が思ったのは無理もない。

「デ？那美さんはどこを怪我したノ？」

明治がベッドにじわじわと広がっている血の染みを見て言う。

……………うわっ！忘れてた！と類は慌てる。

それに対し、那美の反応は軽い。
まるで他人事のようだ。

「ああ。忘れてた。」

「忘れてたってオイッ！！」

類が軽く突込みを入れるも、

那美は無視して保健室を歩き回り何やらゴソゴソしている。
少し離れた所で、海里が那美の行動を注視している。

「何してるノ？」

明治が首を傾げている。

「針と糸を探しているんだけど・・・」

明治に一度顔を向けてそう答えるも
無いな」とボヤきつつ再び探す事に集中し始める。

「あのなあ。そんな医療行為を勝手にして、膿んだらどうする」

類が呆れた様に言う。

「そうだねー。僕らでもちゃんと病院行くもんねー」

省吾がうんうんと頷く。

「下手に触ると後で泣くぞ」

静がボソツと言う。

「大丈夫大丈夫。医師免許持ってるし」

持ってるの？！

ポーカーフェイスな海里でさえ驚きを隠せていない。

「ちよつ、待って！そんな簡単に取れるような資格じゃっ」

省吾が焦って舌を噛む。

いつも飄々（ひょうひょう）としている省吾が、パニックに陥るなど・・・なんと珍しい光景か。

「でも最短でも高校卒業してから6年はかかるよ？」

その頃、貴方何歳ですかっ！！

保健室にいる全員が胸中で突込みを入れる。

異口同音とはまさに、このことを言うのかもしれない。

驚きすぎて、誰も声を出す事ができないでいる。

——絶句。

「あ、発見」

那美が嬉しそうに取り出した糸と針。

しかし、針はまさに家庭科で使う針そのもので・・・

「——その針、医療用じゃねえよな？」

類が確認する様に言うと、那美は困った顔をする。

「うーん。そうなんだよね。」

でも、病院にはご厄介になりたくないからな―
まあ、消毒すれば一緒一緒！たぶん♪」

なんと能天気なっ！！

そしてそれからの那美の行為は、決して語り尽くせるものでもなく・

保健室にいた全ての男共を自ら手を下す事なく、真っ青にさせて
絶に追い込んだという。

暗い闇が辺りを覆っている。

そこには一切の光も存在しない
迷い込んだら最後。
闇に囚われ、命を落す。

そんな所に餌が一人、舞い込む。

待ちかまえていた闇達か餌に襲い掛かる。

「ぎゃああああああ」

悲鳴と骨が碎ける音が辺りに満ちる。

「お前達は流れから外れた」

そして、発せられた声。

闇に平然と立つ男は

目の前で肉の塊と化した物体を怪訝そうに見やる。

「成敗完了」

チンっという音と共に、剣が鞘に仕舞われる。

男は一つ頷き、姿を消した。

-
正体が掴めない3（後書き）

大怪我をしたら、病院へ行きましょう。
決して真似をしてはいけません。

—— 3章 波紋と乱闘 1

「こんにちは」

目の前壁に寄りかかっているのは、例の狐面女。

データによると、名は長島那美。

高校1年、目立たない容姿に似合わず中身は派手。

単純そうでいて、なかなか掴みにくい面をも持ち合わせる。

その他データは謎、そして収集不可。

「ん？貴方に言っているんだけどなあ。

銚葺海里先輩ですよね？」

那美はにこにこ無駄に笑顔を振りまいて、歩みを止めた相手の無表情な顔を見上げる。

「・・・・・・」

「ぷっ！何か用か、とでも言いたげな顔！
意外と表情読みやすいですね。」

1ミリも表情筋を動かしていないはずの海里の顔から何を読み取ったのか、那美が思わずといった感じで吹き出す。
それを見て、海里の目が煩わしそうに細められた。

「そう怒らないで下さい。」

別に喧嘩をしに来た訳ではないんです。」

那美は笑みを深めて言う。

「ちょっとしたお誘いに来ました。

私の元へ来てください」

「・・・俺に龍を裏切れ、と？」

「いい声ですね」

「脱線するな」

那美が驚いて目を見開くと、鋭く苛立った声が掛けられる。

「いいえ、違います。

あくまで卒業後の話ですよ。

まあ、彼らにどう思われるかは別の話ですが」

「馬鹿馬鹿しい。俺に何のメリットがある」

くだらないと言って、海里是那美の前を通り過ぎる。

再び歩き出した海里の背中に那美はちらりと視線を寄越し、深いため息を吐く。

「・・・そっか。

楽させてあげよう、とか思った事が間違いだったかあ。

うん、でもいいや。」

そう呟いて、少し遠ざかった背中に呼びかける。

「鉢舂海里。貴方に予言してあげる。

望んで貴方はこちら側に来る事になる」

それに対し、海里は一瞬那美の方を振り返っただけだった。

これらのやり取りを陰で聞いていた明治は2人が去った後で小さく
呟く。

「どうやら面倒な事になりそうだな」

「そう？」

聞こえた声にビクリと体を震わせ、明治は声の方に振り返る。

そこには腕を組んだ那美が仁王立ちしていた。

夕日が那美の背を照らしているため、影となっている顔の表情は分
からない。

だが、きつといつもの様に微笑んでいるのだろう。

「・・・気付いていたのか」

「当たり前。すぐ分かる。」

貴方達の尾行盗聴は甘すぎるもの。

この前も類が何やら妖しい格好でうろついていたし」

「ま、類はお笑い要員だからナ」

「バレバレすぎて一般人に迷惑をかける様ではお仕舞いね
何よりも可哀想すぎて振り向く事も出来なかった」

先日の事を思い出して、那美は呆れた表情で頷く。
その反応に、思わず明治は笑う。

しかしその笑みはすぐに掻き消える。

「・・・で？さっきの話、本気力？」

明治の問いに、那美は笑みを絶やさず答える。

「もちろん」

「他の奴らは絶対にキレルゾ？」

「ん？心配してくれているわけ？」

「まさ力」

「私は別に貴方達に害を及ぼさないとは言っていない」

「確か二」

「私が貴方達に近づいたのは・・・」

もちろん麗華の事もあったけれど、ほとんどは貴方達を利用する為よ。

私は打算なしで無駄に正体を晒したりしないわ」

忍者も驚く堂々とした態度で那美は言い放つ。

「そこまでハキハキ言われると、逆に快感だね。」

「明治は龍側なのに、何故他人事？」

「俺、後方支援要員だから」

「理由になってないわ」

「じゃ、こういう理由はどうかナ？」

“ただ楽しいから”」

明治の笑みに合わせて、那美もニヤリと笑む。

「うん、いいかもね。」

「こういう事は当事者ではなく第三者視点で楽しむのが一番ダ」

「私よりもいい性格している人、久しぶりに見たわ」

呆れた様に那美がため息を吐く。

「自覚あつたんだ？」

「まあね」

那美はクスリと笑って言った。

「本当に食えない人だ」

明治は去っていく那美の背中を見て呟いた。

海里が図書室に着くと、類と静と省吾は既にそこに居た。

「海里！その後、どうだ？」

図書室にあるまじき声の大きさと、類が声を掛けて来る。

那美の情報の事を聞いているのだという事はすぐに分かった。

「何も」

「そっか」

短い返事に不満そうにする事もなく、類は頷く。

いつも海里が余計なことは言わず事実のみを言う事を知っているからだ。

「手強いねー」

「何か裏についている可能性は無いのか？」

省吾がつまらなさそうに呟くと、静が思いつめた様な表情で聞く。

「それも分かんねえ。何せ情報源がゼロだもんなー」

類が悔しそうに言う。

しかし次の瞬間にはニヤリと笑って、“でも”と続ける。

「でも、それこそが証拠って場合もある」

海里はほとんど彼らの会話に加わる事はない。

聞いているだけである。

意思が無い訳ではない。

ただ、理由がないからだ。

彼自身が動く理由も、龍神のメンバーとして在る理由も唯一つ。

『類』という存在がそこに在る事

類に初めて会った時から、海里が決めていた事である。

海里には、絶対に那美の誘いに乗ることはないという自信があった。
だから、類や龍神のメンバーに先程の事を言ったりはしなかった。

「ところで明治は？」

ふと思い出した様に類が言う。

「サボリじゃない？」

なにせまだ夕方だしね」

「いつもの事だ」

省吾と静が、全く気にしていないという風に言う。

そう、明治が集まりをサボるのは日常茶飯事だ。

ただやる時はやる奴なので、いつも見てみぬふりをしている。

しかし何故かこの時に限って、明治の行動に類は悪い予感を感じた。

だがそれも一瞬の事で、類は自分の直感を奇妙に感じつつも特に気にする事は無かった。

そしてニヤリと笑んで言う。

「まったく、仕方ねえ奴」

その建物の中には、暗い闇しか存在しない。

窓には日の光さえ拒むような厚手のカーテンが引かれ、外界と一線を画している。

建物内部の天井には蛍光灯が一応はあるものの、部屋の所有者が今の者になってからは一切使われていない。

ふと、建物の出入り口が開かれた。

外へと繋がる扉はそこしかない。

西へと傾き赤く染まった太陽の光が、建物内部に光の筋を残す。しかしそれも一瞬の事で、再び閉ざされた今では深い闇が辺りを覆

っている。

入ってきた人物は、どこに何があるのか分かっているのだろう。
玄関から数十歩離れた場所にあるソファにどさりと全体重を預ける。

「ただいま」

ソファに身を預けたまま、呟く。

「おかえり」

低い男の声が闇を通して耳に届く。

「来てたんだね」

「駄目だったかい？」

「いや……」

「また、やって貰える？」

「いいよ」

「こんな思いをさせて、すまない」

男が深くため息を吐いて、自嘲気味に言った。

「望んだ事だから」

「それでも……僕は」
いちれんたくしょう

「蓮托生。」

始まったら、もう止められない」

男の言葉を遮るように、言い切る。

「……じゃあ、テーブルにでも置いておくよ」

男はそう言つて、部屋を歩き出す。
が、入ってきた人物の様にはいかないのか、何かにぶつかる様な音が足音に付随する。

「電気点けても良かったのに」
「でも、君が嫌だろう?」

男の苦笑する声が響く。

「置いたからね。いつも通り宜しく。
僕は帰るよ。」

「良き闇の眠りを」

「良き闇の眠りを」

男の言葉を復唱する。

しばらくして再び建物の中に一瞬光が差し込んだ。

波紋と乱闘2

「ああ、あと2ヶ月か」

類が感慨深げに呟いた。

「何が？」

間髪入れずに類の横に居た那美が聞き返す。

「何がってお前・・・ま、那美にはあんまり関係ねえよな」

類は教室の窓から視線を外して、那美へと視線を戻す。

「だから何が、よ」

「卒業式。」

今年はまた結構な人数が龍から出て行っちゃうんだよなあ」
「例えば？」

興味無さそうに問うと、類は驚いた顔を向けてくる。

「おま・・・っ!!」

なんていう薄情な奴なんだ！

知り合ってから、結構経つだろうっ?!!」

「そうは言っても、たったの3ヶ月ぽっちょ」

「十分だろうっ！

海里だよ、海里！

一番の頭脳派が居なくなっちゃうんだ!」

「ああ、その事」

「本当にお前は薄情だな」

呆れた様に類が言うと、那美は首を傾げる。

「何で？」

別に学校を卒業する事と龍とは関係ないでしょう？」

「あー・・・お前は龍のメンバー条件なんて知らないよな」

ガリガリと龍は頭を掻いた。

「龍のメンバーでいる最低条件は、高校生であることなんだよ」

「そんなに抜けられるのが嫌なら、変えちゃえばいいじゃない？
今の龍のアタマは類なんだし。」

「・・・駄目なんだよ」

「何で？」

「社会人になると、生徒とは立場が違う。

もちろん考え方だって変わってくるだろ？

そうなる普通の奴らじゃあ考えも付かない様な事が出来ちゃう。
権力とか金とか使つてな。

龍神があるのは、暴れたい奴の拳で始まって終わる喧嘩の為だ。
それを破ったら、そこら辺にいる暴力団と同じだろ」

「暴力団がそこら中にごろごろ居るみたいない方やめて。

・・・っていうか、類って結構頭の回転良いのね。

私、ずっと単なる喧嘩馬鹿だと思ってたわ」

心底びっくりした顔で那美が言った。

それに対し、類は眉間に縦じわを刻む。

「・・・お前なあ、もっとオブラートに包めよ。

お察しの通り、これは受け売りだよ、くそっ」

「へえ、誰の？」

興味津々といった様に目をキラキラさせて、那美は聞く。
類はムスツとした顔で言う。

「……海里。」

昔俺もお前と同じ事言ったことがあったんだよ」

「へえ……類と同じ、ねえ」

「何でそこで不満そうな顔をするっ！！」

「……だって、ほら、ねえ？」

「意味わかんねえよ！」

つか、哀れみの視線を寄越すなっ」

類が駄々っ子の様に喚く。

と、背後からによきつと手が生え、類に目隠しがされる。

「ずいぶんと楽しそうだね」

「何してんだ、コラ」

無邪気な笑みを溢しながら現われたのは、省吾だった。

類は目隠しを何とか外そうと身を擦ったり暴れたりするが、相手も然るもので一向に外れる気配がない。

「おいっ！那美！居るんだろ？！手伝え！

くそ、この馬鹿力がっ！」

「何騒いでるんだか」

類の言葉に省吾が呆れた返事を返し、手を外す。
そこでようやく類は自分の置かれた状況を認識することができた。

視界の開けた先に那美の姿は無かった。

「・・・・・・・・あれ？」

なんとも間抜けな声を発する類を見て、省吾が背後で頭を抱える。

「那美ちゃんなら僕が来てすぐ、綺麗な笑みを残して去って行ったよ」

「俺を人質にするとは、奴め、やりやがる。」

「こんなのが頭とか・・・・・・・・・・・・・・・・」

ねえホントもう僕、龍抜けていいかな？」

「いいや、ちよつと待て。」

何か話があつたんじゃないのか？」

呆れ顔のまま去っていかうとする省吾の肩を右手でガシリと掴んで捕獲する。

仕方ないなと笑ってから、スツと表情を正した省吾が類の向かいの席に腰掛ける。

その顔を見て、類はひらりと右手で何かを払う仕草をした。

すると、教室で興味津々に耳を傾けていたクラスメイト達が、波引く様に姿を消していく。

そつ、それは『龍神の頭』としての人払いの合図だった。

「で、何？」

類は小声でそう言い、身を乗り出す。

「海里に類が調べるって言ったのは
那美ちゃんの周囲でしょ？」

「ああ、それがどうした？」

「海里は類の言ったことを忠実にやる子だから
きつと那美ちゃん自身の事はほとんど調べてないだろうと思ってね」
僕の家をちよこつと使って、調べちゃった」

省吾の生家でもある北村家は、所謂金持ちというやつである。

だいひょうとりしまりやく

代表取締役を彼の父親が祖父から継いでからも飛躍的に成長を続けている大企業の御曹司である。

訳あって今はこんな高校にいるが、本来なら類とは関わりあいの無い人物である。

「調べちゃった、ってお前……俺に一任とかいう話は何だったんだ？」

「でも類も、一人でっていう話だったのに
海里に頼んじやったりしてるよね」

「うぐつ……まあい。で？」

「うん、でね。結構面白い事が分かったよ。

那美ちゃん、実は聖リアリス女学院の生徒だったみたいなんだ」

「聖リアリスって言やあ

偏差値の高いお嬢学校じゃねえかつ！」

「そうそう。

で、ちよつとばかり荒れてたら警察に捕まっちゃって

高校には行けなくなっただって」

「で、瀬戸際に来たど？」

それはまた・・・アップダウンの激しい転落人生だな。頭がやたら良いのも、その所為か」

「彼女の両親は既に他界してて

家族は実の兄だけなんだけど・・・その兄がまたまた凄い人みたいなんだよね。

なんといつてもあの東大出のエリートだし」

「何?!マジか!!」

兄弟揃ってバケモンかよ・・・親の顔が見てみたいぜ」

「でも、おかしいんだ」

省吾が途端に怪訝になる。

ぐつと眉間に皺を寄せて唸る。

「何が」

「それ以上、分からないんだよ。

北村家の名を使って調べたのに、それしか出てこない。

こんな事は今まで無かったのに」

いつもの飄々(ひょうひょう)とした雰囲気は、今の省吾には一切無い。

「つまり・・・とんでもねえバッグが背後にいるって?」

「うん、僕はそう踏んでる」

省吾の目がギラリと光った。

どうやら本気になる様だと、類は顔を引きつらせる。

本気になった省吾が、そこら辺の暗殺者よりも怖いのは身をもって

知っている話だった。

「那美ちゃんって、楽しい事いっぱい隠してそうだよ」

につこりと死神も冷や汗ものの笑みを、省吾は思わずといった感じで溢す。

数メートル程、引き下がりがたくなるのを必死で堪えて、類は頷く。

「そ、そうか・・・」

リーダーとして情けないのは重々承知しているが、今の省吾ほど敵に回したくないものは無い。

「入ってくれ」

2度ほどノックした後、聞こえたドア越しの声に反応して、海里はそのドアを内側に開く。

入ったすぐ脇に立ち、背後でドアが閉まるのを耳にする。

広い部屋には長机と椅子が2脚あり、内1脚は埋まっている。

楽しそうに茶色の目を細めた痩せ型の男がそこには居た。

色素が元から薄いのか、金に近い黄土色の髪をオールバックに纏めている。

全身にビシリと灰色のスーツを着て、若いながらも上に立つ風格を纏っている。

男に向き合う様に長机を隔てて置かれた椅子が、海里の中の緊張感を助長させる。

「銚茸海里君だね？」

男は人好きのする笑みを浮かべて問うた。

— 波紋と乱闘2（後書き）

実は那美は龍神のメンバー条件をあらかじめ知ってました。海里を引き抜けると思ったのも、その所為です。類への質問はわざとです。

波紋と乱闘3

「・・・・・・・・」

海里は振り返り、ぐつと首を反らせた。

目の前に聳^{そび}え立つのは巨大なビル。

普通なら一高校生が易々と入れる場所ではないが、今日ばかりは違った。

手に握った顔写真付きのカードがそれを証明している。

“実はね、君の採用は既に決定されているんだ。

わざわざ来てもらってすまないが

今日の面接は形式的なものなんだ。

正式な面接をせずに雇ったりすると、社会的に色々問題があるからね。

あ、とりあえずこれ渡しておくよ”

男がそう言って渡してきたカードに、海里は目線を落とした。

海里は1つ溜息を溢した。

それが緊張が切れた事によるものなのか、それとも何か他の感情によるものなのか、それは海里自身にも分からなかった。

「……………かった」

授業中、小さく開いた携帯の画面を盗み見て、那美はぼそりと呟いた。

彼女の口には僅かに笑みが浮かんでいる。

そんな那美の様子を自分の席から遠目に見てしまった類は眉間に皺を寄せた。

那美はそこに居る女子とはかけ離れた存在だ、と思う。
絶世の美人だとか外見的なものではなく、存在がである。

常に浮かべている笑顔は胡散臭いモノであるはずなのに、それを見る相手に嫌悪を抱かせない辺りとか

どう見ても突飛な行動をしているはずなのに、最終的には“ま、那美だから”と納得させられる辺りとか

何よりも、会話や行動などから自分を探らせない辺りが特に、普通とは違っている。

そして普通とは違っているはずなのに、話をすると難なく溶け込んで違和感を感じさせない。

「何なんだ、本当に」

困惑しきった表情で類はため息を吐いた。

「そつだな、本当に何なのだろうな？」

返事が耳に届き、類の背筋はあわ立つ。

顔を上げると、そこには丸めた教科書を手に打ち付け拍子を取る、鬼の様な顔の教師がいた。

「今は授業中だぞ？」

ただえさえ勉学は最低クラスのお前が、
何でそんな余裕でいられるんだろっな？」

ちなみに余談だが、瀬戸際高校は内包する大量の不良生勢力を抑え込む為に強力な教師陣を雇っている。

それこそ、元暴力団員とかその筋ではエリートと呼ばれていた者達ばかりだ。

そんな彼らに元の職の顔で迫られれば、いかに類といえど恐れは抱くものである。

類は寸先の自分の未来を想うのであった。

「馬鹿・・・」

口から半透明のものを出して机に突っ伏す類を見て、那美は半目で
呟く。

あらゆる手を尽くして、自分の事を色々と探っている事は当の昔に
気付いている。

まあ、あれだけ大規模な情報収集をしておいて、気付くも気付かな
いもないのだが。

家の前で屯する黒スーツ・グラサンの男達を見たときは、おおいに
脱力した。

那美自身が裏の伝手で探った所、すぐに北村省吾の仕業なのだと簡

単に分かった。

他人を探る前に自分の事だろ、と思う。

あまりにも幼稚な奴らを思い、那美は一人静かに嘆息する。

しかし、そんな中にも侮れない奴は必ず居るもので。

「で、どう？」

海里は取り込めタ？」

おそらくこちらの動向を最も掴んでいるのであろう男、飯塚明治は最近よくこう訪ねてくる。

今日はそれが放課後だっただけの話。

「さあ？どうだと思う？」

そして那美はいつもの様に、問いを問いで返すのだ。明治は愉快そうに表情を緩めて、那美に迫る。

「ね、協力とか欲しい？」

「なに？してくれるの？」

こちらも負けずにニコリと微笑んで聞く。

「うん。そろそろ龍の腹で遊ぶのも飽きてきたしネ」

「貴方こそ、恨み買っんじゃない？」

「そうかもネ。」

でも、龍に入ったのも成り行きでだシ？

海里みたく、どうしてもここじゃなきゃっていう理由もないしネ」
「楽しめたら、いい訳ね」

那美は呆れたように、そう返す。

「って、そんな人を快樂殺人者みたく言わないでヨ。
俺にだって一応やっていい事と駄目な事の判断基準はあるんだから
さア」

「へえ？意外。
じゃあ、私を絶対裏切らないと約束するなら考えてみてあげてもいいわ」

出来るものならやってみろ、と言いたげな笑みで那美は言った。

「いいヨ。
それどころか、俺は今日から貴方の従順な下僕になることも誓って
あげル」

明治は何処か嬉しそうに微笑んで即答した。

「フンっ、信用出来るわけがない」
「俺、さっき言ったでシヨ？」

判断基準はあるっテ。

それはね、口に出した事は絶対に破らないっていう大原則のこと」

「じゃあ、龍は何で？」

「彼らに言っただのは、“俺の気が続くまで、付き合っただげるヨ”
って言葉。

絶対に裏切らないとは言っただけ」

「ずる賢い男」

那美は鼻で笑って、明治をまともに相手しようとしな
業を煮やした明治は、那美の背後にある壁に両手をついて彼女を囲
い、顔をぐつと近づけた。

目が妖しく光るのが那美にも見て取れた。

「だから、ネ？」

裏切らないって誓うから・・・」

彼の言葉には、どこか懇願するような響きがあった。

いつの間にか那美の笑みは消え、それに呼応するようにして悲し
みが目に宿る。

那美は明治の頬から顎にかけてを右手で撫で上げる。

「私は信じない」

明治の腕を抗えない力で持つて壁から外し、その場から立ち去る。
残された男は頬に残る熱を求めて左手を自身の顔に添える。
そして力なく壁に背を預けると、苦く笑ってぼそりと呟いた。

「きついナア。」

これが惚れた弱みって奴力」

そうだった理由なんてものは些細な事に過ぎない。

あるのはその想いだけ。

男は想いを成就させるべく、長期戦を覚悟した。

まずは・・・そう、

「誠意を見せる」

言った後で、何て自分に似合わない言葉だ、と自分を嘲笑った。

— 波紋と乱闘3（後書き）

え？予想外？・・・そんな事はありませんよ。ははっ

波紋と乱闘 4

今でも、あの衝撃を覚えている。

流れた血の分だけ想いは胸に刻まれ、業が身を焦がす。

焼け爛れた匂いにつられ、やってきたのはいつかの狩人^{かりうと}だった。

霧を纏わせ現われた狩人の手には、世界の縮図。

中で踊る者を笑い、時に手にかける。

そして最後には、お得意の霧で姿をくらます。

生き残った者に深淵を残して……

薄らと目を開けた先にあったのは、窓から差し込む太陽の光だった。

「……朝」

那美はぼつりと呟いた。

「久しぶりにこっちに帰ってきたと思ったら
こんな所で寝ていたのか」

自分が寝ていたソファから身を起こして、那美は傍に立つ男を見やる。

「………兄さん」

男―鎌はソファに座る那美の傍に屈んで、彼女との視線を合わせる。

「また・・・夢を、見たのか？」

伸ばされた手が目元を優しく擦る。

「久しぶりに見た気がするわ」

「まだ那美にとって、この家は苦痛なのか・・・」

眉を八の字にして鎌は嘆息する。

那美は俯き加減になった鎌の頬に手を添える。

無言のやりとりが二人の間で交わされた。

そんな静謐な空気を最初に破ったのは、鎌の方だった。

「今日は来るのか？」

「行くわ。でも、猶予は与えたままで」

「そこら辺は、リツに任せたら大丈夫だろう？」

「そうね。彼なら上手くやってくれるわ。」

・・・文句は言われるでしょうけど」

那美はそこで初めて小さく微笑んだ。

「・・・で？猶予を与えてどうするつもりなんだい？」

鎌も笑みを浮かべたが、それはどちらかといえば悪戯っ子の様なものだった。

「ちょっと大掛かりな釣りをするつもりよ」

「大物？」

「私からしてみれば小物よ」

「那美と比べる事が間違ってると思うな」

「兄さんから見ても小物よ」

那美の答えに鎌は怪訝そうな顔をする。

「じゃあ、何故だい？」

「放っておいたら、必ず敵に回る自信があるからよ」

「芽は早めに、って事か」

返答の代わりに那美は笑みを浮かべた。

「我が妹ながら、とんでもない事を思いつくと思わない？」

朝の会話を再現した鎌がくつくと声を立てて楽しそうに笑った。

聞いた方が眉間に皺を作っているというのに、鎌はお構いなしだ。

鎌の横に立っていた男は小さく溜息を吐いた。

男は、社会人にあるまじく真っ赤に染めた髪を見苦しくない程度に整え、ノーネクタイで黒いスーツを着込んでいる。

まるでホストの様な外見の男は、周囲に重い空気を散らしている。

現在部屋には2人しかいない為、その空気の被害対象者は鎌のみである。

もつとも、対象である本人は歯牙にもかけずに笑っているが・・・

「丸め込んで仲間に、ねえ？」

それが先日貴方自ら会った理由ですか・・・

しかし上手くいくとは限らないでしょう？」

赤髪の男が顰め面のままにそう零すと、鎌は心外だと言わんばかりに片眉を上げて答える。

「リツ、今までに失敗した事が彼女にはあったか？」

「無いですね。」

「……しかし、今回の件は人間の心情が関わってくるんですよ？」

赤髪の男がしぶしぶといった感じで頷くも、すかさず反論する。

「出来事に人間の心情が関わっていない場合など無いよ。」

「これまで那美が成功してきた事柄に関してだってそうだった」

鎌は淡々とした口調で、相手を諭す。

「どっちにしろ、尻拭いは俺なんでしょう?」

「下品だよ、リッ。後始末と言ってくれ。」

妹がもし……まあ有り得ないとは思うが

もし失敗したら、いつも通り頼む」

「^{たが}籬を外したシスコンは怖いですからね。

「言う通りにしますよ」

赤髪の男は肩を竦めて、鎌の願いを受け入れた。

「で、木村製のハエはどうするんです？」

「那美は放つといっても構わないとは言っていたが・・・」

「彼女が言うなら間違いないのでしょぅ？」

「
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
そうだな」

鎌はふうと息を吐いて背を椅子の背もたれへと預ける。

赤髪の男はそれを見て、苦笑した。

その時、鎌の前にある執務机の上に置かれた電話が鳴った。

傍らに立っていた赤髪の男が、机に近寄り受話器を取り上げる。

「何だ」

先ほどまでとは異なる硬い声で問い、用件を聞くと受話器を戻した。

「来たのかい？」

鎌がニヤリと笑って、確信に満ちた声で問うた。

「ええ・・・お出ましますよ」

鎌は椅子から立ち上がると席を赤髪の男に譲り、言った。

「ではお願いしますよ、たちはなぐみ橘立文代表取締役”」
「こちらこそ？優秀な”ながられんじ長良鎌二人事部長”」

赤髪の男は鎌に合わせて答えた。

海里は受付で言われた部屋の前に立っていた。

目の前には重厚そうなこげ茶色の木製のドア。
ドアに貼り付けられた金色のプレートには、『社長室』の文字が彫られている。

新入社員にしては破格の対応に戸惑い、海里はしばし部屋の前で立ち尽くす。

が、しかし相手に機嫌を損ねられて解雇にされても困るので、海里は覚悟を決めてドアを控えめにノックした。

「入れ」

海里が入室すると、中には二人の男が居た。

書類が何束か積み上げられた執務机の奥の椅子に偉そうに腰掛けた赤髪の男と、先日面接で会った“長良鎌二”だった。

「初めまして、俺は橘立文だ。

お前が銚葺海里だな？」

「はい、宜しくお願いします」

海里は無表情のまま頷く。

“立文”は、ほう？と片眉を上げて感心した様に頷く。

「なるほど」

ぽつりと零したその言葉に内心で首を傾げていると、“立文”は笑って否定した。

「すまん、なんでもない。

ところで、銚葺は瀬戸際高校出身だそうだな？」

「はい、そうです」

「何故自分がここに就職できたんだ、という顔つきだな、ん？」

「はい」

「それはだな、お前が龍神の幹部だと知ったからだ」

海里の目が一瞬驚きで見開かれる。

しかし、“立文”の横に立つ“鎌二”も驚いた顔をしているのを見て、この事実はほとんど知られていないらしいと判断した海里は表情を元に戻す。

海里の一連の挙動を見て、“立文”は面白そうに目を細めた。

「ところで銚茸、君は秘密を厳守できると誓えるか？」

「・・・・・・・・はい」

海里にとって黙るという事は苦痛ではない。
むしろ得意だった。

「我が社は特別な部署を有している。

正式名は無いが、我々はU部と呼んでいる。

U部は敵会社の妨害工作の対抗組織として作られた。

君をそこに配属しようと俺は考えている」

「・・・・・・・・」

「君の龍神で培われたデータ収集能力や作戦構築能力は十分に評価に値する。

U部では是非活かして欲しいと思うのだが、どうだ？」

海里はごくりと唾を飲み込み、慎重に答える。

「やります」

自分をここまで評価してくれる会社など他にはあるまい、と打算的

に考えて海里は答えを弾き出した。

「決定だな。」

卒業までは、あまり仕事を入れないでおこう。

ただし、緊急招集および与えられた任務は

必ずやり遂げる事を条件とする」

「はい」

「ちなみにU部は部長がリーダーだ。

高校の教師とは違い、リーダーの命令は厳守が絶対条件となる。

後日、君の元にU部メンバーを1人送るから従うように」

「はい」

「今日はご苦労だった。

帰りました」

「失礼します」

海里は礼をして、退出する。

完全に閉まったドアを見た鎌が、リツと名を呼ぶ。

「アドリブは止めて貰いたいな。

どこまでバラすのかと一瞬本気で驚いた」

赤髪の男は椅子から立ち上がりながら、鎌の言葉に笑う。

「だからこそ、相手は疑いを消したでしょう？」

「優秀な部下を持てて嬉しい限りだよ」

「褒め言葉として受け取っておきます」

— 波紋と乱闘4（後書き）

更新遅れてしまいました。

楽しみにして下さっていた方、すいませんでした。

波紋と乱闘5

耳元で携帯の着信音が鳴る音を聞いて、海里はその目を覚ました。すかさず手に取り携帯の着信画面を見やると、そこには長良部長の文字があつた。

その文字を見て寝ぼけた頭が一気に覚醒する。

一呼吸おいて自分を落ち着かせ、通話ボタンを押す。

『おはよう』

「・・・・・・・・・・・・・・・・おはようございます」

『突然電話してすまないね。』

昨日高校卒業まではそんなに仕事は入らないとか言っておいて、こんな事を言うのもアレなんだが・・・・・・・・

「仕事ですか？」

『ああ。ついでに仲間を1人紹介しようと思う。』

・・・・・・・・駄目かな？』

「・・・・・・・・拒否権は無いのでしょうか？」

『ふっ・・・・・・・・分かつてるね。』

じゃ、15時に社長室で会おう。

場所は分かるよね？』

「はい」

『良かった。ではまた後で』

プツツという音が聞こえて、電話が切れた事を理解する。
ツーツーという無機質な音を出している携帯を見て、自分はとんで

もない所に就職してしまったのではないだろうかという思いが一瞬海里の脳裏をよぎる。

しかし、考えても仕方の無い事だと海里は頭を振って、これからへの不安を消し去った。

「失礼します」

社長室へと入室すると、“橘立文”と“長良謙二”が居た。

“立文”は突き刺す様な視線を海里へと送る。

「呼び出して、すまん。

緊急事態でな」

「・・・いいえ」

海里の返事に首肯を返し、“立文”はついと視線を1つのドアへ送る。

そのドアは海里が入ってきた扉に対して垂直に位置するものだった。“立文”の視線を理解したのか、“鎌二”がそのドアへと歩み寄って内側に開く。

ドアがあつた場所に居たのは、どうにも小学生にしか見えない少年だった。

目深に被った野球帽からは黒髪先端が飛び跳ねる様にして出ており、唾から覗く同色の目が海里を捉える。
頬には四角い絆創膏を貼り付け、見ている者にやんちゃな印象を与える。

着ている服はフード付きパーカーに短パンと、至極動きやすいものだ。

少年は顔を“立文”へと向け、片手を上げて実に気安く挨拶をする。

「よつす、社長」

「ああ」

“立文”は苦笑いを浮かべて少年の挨拶に答える。

「俺に何か用？」

「新人だ」

不思議そうに問う少年に、“立文”はニヤリと笑って海里を指差す。
少年は海里を一瞥すると、ズカズカと部屋へ侵入して海里の前に立つ。

そして胡散臭そうに海里を上から下まで丹念に目で調べ上げ、再び

“立文”へと向き直る。

「冗談？」

「いや、冗談ではないよ。」

・・・ああ、すまない。

彼がU部部長の唐草満からくみつるだよ」

“立文”の言葉に、海里の目が見開かれる。

自分でもU部部長に何を想像していたのか分からないが、少なくとも目の前にいる様な少年でなかった事だけは確かだった。

「唐草満、ミツルって呼んで。

お前は面倒だから、カイな。

・・・で？

カイと何しろって？」

どこことなく馬鹿にされている感じがするも、自前のポーカーフェイスで海里は表面に出そうになる不満を塞ぎ止めた。
もつとも、意味ありげな目線を送ってきた“立文”には見破られている可能性が高いが。

「ハエの除去」

「ふうん？ま、それ位なら大丈夫か」

満は海里をチラリと見て、そう結論を出した。
そして海里のぐつと力^{りき}んだ拳を見て、満はニヤリと笑みを浮かべる。

「最初から、あまり虐めては駄目ですよ？
途中で辞められては、こちらも大変ですから」

楽しそうに目を細めた満に、“鎌二”が穏やかな表情で注意する。

「うん、分かってるよ。

弱小動物は可愛がって育ててあげないと、グレちゃうもんね？」

がらりと口調を変えて、満は頷く。
さっきとのギャップに海里は気持ち悪さを感じていた。

「・・・行ってくる」

両手を短パンのポケットに突っ込んで、満は開けっ放しのままだつた扉から部屋を出て行く。

海里は“立文”と“鎌二”に対して軽く一礼してから部屋を出て、扉を閉めた。

そして少し先の廊下で佇んで待っている満の所まで、小走りで行って追いつく。

再び歩き始めた満の足音が一切しないのに気が付き、海里の背中に冷や汗が流れる。

1人分の足音だけが廊下に寂しく響いた。

「なあ、カイ」

「・・・」

「人を殺せる覚悟はあるか？」

驚きで一瞬海里の足が止まった。

それをどう思ったのか、満は笑って言葉を付け足す。

「敬語は必要ない」

「・・・考えもしなかった」

「ふっ、正直だな。」

だが、それが時に仇となる^{あた}

「どういう意味だ？」

海里の問いに満は振り返って、口元に弧を描く。

「その内分かる。」

・・・安心しろ。
今日は半殺しだ」

どちらもそう喋るタイプではないのか、その後目的地に着くまでそれ以上の会話はなかった。

そこは暗い路地。

かろうじて人の輪郭が認識できる程度の光がなく、視界は悪い。しかも衛生環境が整っていないのか、じめじめとしていて何処からか腐臭が漂ってくる。

ここで戦うのなら、今履いている革靴は駄目になると海里は心中で溜息を零す。

「カイ、分かるか？」

「ああ」

満の問いに海里は頷く。

何人かの足音が先程から頻繁ひんばんに海里の耳に届いている。分からないはずなどない。

「弱いから数に頼るしかない面倒な八工だ。

今回の任務は、奴らを全員半殺しにする」

「分かった」

返事と共に海里は、右から迫る人影に向き直る。

そして相手の顎を目掛けて右拳を突き上げる・・・が、相手にギリギリで避けられてしまう。

相手の頬に右手の甲が掠った。
今度は左拳を、振り上げた右手のすぐ右脇目掛けて打ち込む。

「はあっ！」

ゴツという鈍い音と共に相手が崩れ落ちるのを、目の端で捕らえる。自分に掛かった動力を利用して、そのまま時計回りに回転し、背後に迫る人影を革靴で蹴り倒す。
と、から空きになっていた左側から敵が迫る。
敵の拳が、海里の防御より早く彼に迫った。

「鈍い」

満の声だ、と理解した時には既に相手は地に伏せていた。

「2人か・・・駄目だな」

満は鬱陶しそうな溜息を吐いて、海里を見る。
海里は満の後ろに人が積み上げられているのを見て、啞然とする。

「それでも俺は瞬殺が得意だからな。
俺と比べるのは間違っているが・・・しかし・・・」

ブツブツと満が何やら呟くが、しばらくすると諦めた様に頭を振って海里に向き直る。

「・・・まあ、いい。」

さて、写真を撮って帰るぞ」

「写真？」

「そうだ、証拠になる。」

殴る前の奴が欲しかったんだが

初めに言っておかなかった俺も悪いしな。

あとは、カイが倒した2人だけだ」

満が海里の足元に向かってシャッターを切る。

別に見たい光景でもないので海里は満の傍を離れ、彼が作った山へと近づいた。

軽く数えても10人以上いる山を見て、満の凄さを理解する。

もしかすると類よりも強いかもしれないと、類が自分より強い奴を見た時の彼の嬉々とした表情を思い出し、海里は目を細めた。

「帰るぞ」

背後からの満の言葉に頷いて、海里は踵を返す。

波紋と乱闘 6

「終わった」

「そうか」

満が差し出したデジタルカメラを、“立文”は表情を和らげて受け取る。

そしてカメラを操作して証拠を見ていく。

目を通すにつれ、“立文”の表情が徐々に険しくなっていく。

「…………やはり」

全て見終わると憂い顔になり、“立文”はぽつりと呟いた。

「杞憂きゆうであれば良かったのですが……」

“鎌二”が“立文”に答える。

「鎌、二まで驚くなんて珍しい。

奴らは何者だ？」

眉間に皺を寄せて満が話に混ざる。

それをこそ珍しいのではないか、と感じつつ海里はそれとはなしに聞く。

「…………カイ、聞く勇氣はあるか？」

そして何故か、“立文”は海里へと問う。

まさか、という考えが海里の脳内で形作られる。

海里は礼を失するとは分かっていながらも、執務机に駆け寄りデジカメを“立文”から奪い取る。

その画面に映っていたのは、瀬戸際高校の制服を着た生徒だった。

「・・・騙したな」

キツと“立文”を睨み付ける。

「騙してなどいない。

確証がなかったから、言わなかったただけだ」

「詭弁きへんだろう！」

「そうかもしれない。

だが発言する前に一度よく考えてみる事だな」

「・・・っ！何を！！」

「君は一体どちらの人間だ？

目先の事に捕らわれて将来を捨て去る程に、君は愚かなのか？」

冷酷な目線が“立文”から海里へと注がれる。

ピリッとした空気が辺りを包む。

苦虫を噛み潰したような顔で海里は礼をし、荒々しく扉を閉めて執務室から出る。

「あーあ・・・リッつたら虐めすぎだろ」

満が面倒くさそうに言い捨てた。

「でも、これで海里君は自分の立場を認識できるでしょう？。」

鎌が“鎌二”の仮面を剥ぎ取り、につこりと笑んで言う。
そこに、先程までの緊張感溢れる作り顔は欠片もなかった。

「・・・へえ

もしかしてコレ、鎌が考えたの？」

どこか青白い顔で満は鎌を見やる。

「・・・いや、妹だよ」

「うわー・・・道理で容赦ないわけだ。

俺、あの人だけには逆らいたくないな」

「同感だ」

しみじみとした空気が“立文”と満の間に流れる。

問題が起きた。

先日までの日常が嘘のように崩れていくのを、類は感じていた。

何故だと直接本人に問い詰めに行きたくなるのを堪え、類は背後に振り返った。

暗くなった教室で月光に照らされて浮かび上がる、3人の幹部達の姿。

姿のない1人を思い、類は重い口を開く。

「状況は？」

「裏路地で多数の情報収集員と構成員が襲われた。見つけたのは、連絡が取れなくなったのを心配して控えていた奴。……そして、残されていたのはアイツの定期入れ。」

省吾が机の上に、血まみれの黒い定期入れを置く。

「あの男だけでは、この惨状は作り出せない。裏に誰かいると考えるのが、妥当だろう。」

「……正確な敵も分からない状況で、むやみに動くのは得策ではない。」

省吾に続いて静が、一枚の写真を定期入れの横に置く。そこには、人の体が積み重なって出来た山が写っている。

「じゃあ、どうやってアイツに確認を取る？」

今動かなければ、アイツは二度とここには戻ってこない」

「類……これは裏切りだ、既にはつきりしているよ。許される事じゃない。」

でもね、考えてみれば相手は半就業者。

それに元々もうすぐおさらばするはずだった相手なんだよ？

既に仲間でもなかった奴に、確認を取る必要が何処にあるの？」

「もし本当にアイツが裏切ったのなら、俺がアイツを潰す。」

「……そう、この場には海里の姿だけが無かった。」

「だから……！」

俺を……っ！！」

「個人的感情は組織を狂わせる。」

リーダーたるお前のは特に、だ」

類が齒軋りしながら苦しげに出した声に、静の鋭い忠告が刺さる。

「類と海里の過去は、なんとなくだけ聞いてるよ。

でも、だからといってリーダーがそれに流されては駄目だよ」

「………明治、お前は」

どこか救いを求める様な目をして、類は沈黙を守っていた明治へと顔を廻^{めく}らせる。

「俺は類に賛成だナ」

「「明治っ！」」

省吾と静が驚いた声を上げて、明治の発言を責めた。

「はつきり言つて、俺は類と海里の過去なんてどうでもいい。最終的に裏切りを叩き潰せられれば、他はどうでも」

「だが、もう直ぐ抜けると決まっていた一人の裏切りために組織全体を動かすのかっ！

それはやりすぎというものだろう！」

「じゃ、見逃せば？」

そうなれば幹部の責を問われるだろうけどネエ。なにせ、今回の裏切りは幹部から出たんだから」

しみじみとした口調で明治は静に言及した。うぐつ、と静は言葉に詰まる。

「類、決めるのはお前ダ」

明治の言葉に、類はぐつと拳を握り締めた。

「・・・分かった。」

今回の件は任意でいい。

付いて来たい奴だけ俺と来ればいい」

類はそう言っで、教室を後にした。

「俺は、今回の件には関わらない」

静が残された2人に振り返って告げた。

そして、2人が頷くのを見るや否や類の後を追うように教室から去っていった。

閉まっていくドアを見つめる明治が浮かべる軽薄な笑みを、省吾は横目に見る。

「何故あんな事を言ったの？」

「あんな事って？」

「しらばっくれるのは止めにしない？」

若干苛立った口調で省吾が言う。

「何の事やう。」

俺は本当の事を言っただけだガ？」

「今の龍神の状況を、君は誰よりも分かっているはずだろう？
続けて起きた襲撃事件に情報収集員の相次ぐ負傷・・・

この組織はガタが起き始めている」

省吾の言葉に明治はクスリと笑い声を漏らす。

「・・・何がおかしいの？」

「後ろの方は完全に指示ミスだヨ。」

「下っ端が俺らに不信感を抱くのも無理ない」

「それが分かってて何故・・・っ！！」

「今回の事を部下達が知れば、更に不信感が増す！」

「そして最後にあるのは龍神の崩壊だよっ！」

「それが何だと言うんだ？」

「・・・何だと？」

「龍神が潰れるからと言って、俺には何ら問題ない。」

「お前達は、過去の遺人達が造り上げた幻想に頼りすぎタ。」

「龍神は完璧な組織だと驕り過ぎタ。」

「その結果がこれだよ、分かる力？」

「お前はそれでも、幹部かつ！」

「確かにお前の言い分は正論かもしれない。」

「だが、それが分かっているなら何故、今回の事を大事にしようとする！」

「省吾の叱責に明治は笑みでもって答えた。」

「俺が龍神に入る時に、言った言葉を覚えている力？」

「・・・何の話だ」

「俺は類について行くヨ」

「結局最後まで笑みを消す事なく、明治は省吾を残して教室を出て行った。」

「・・・何を考えている？」

「何を・・・何が起きているんだ？」

「1人残された省吾の呟きは、誰の耳にも入ることはなかった。」

—— 4章 交差する心 1

真夜中の暗い歩道を類は歩き続ける。

深夜という時間帯にも関わらず、車の往来は多い。

「やつぱ戻れねえよなあ」

全体よりも個を優先させてしまった自分は、と類は苦笑する。

海里の件は1人で動く、と啖呵を切ってから類は学校をサボり続けている。

それが完全な逃げだという事は自分でも理解していたが、今はどうしても龍神の仲間には会いたくなかった。

顔を見た途端に、殴りかかってしまいそうで・・・

「龍神はもう、駄目か・・・」

龍神という組織に刻一刻と近づく終わりを、類とて既に悟っていた。今までの楽しかった日々^はに思いを馳せ、立ち止まる。

「何で俺を裏切ったんだ、海里」

悲しい表情を浮かべて、類は真っ暗な空を仰いだ。

「うあああああつ！！」

唐突に、誰かの叫び声が鼓膜を貫いた。

鬼気迫るその声に、通りを行き来していた誰もが思わず辺りを見回していた。

御多分にもれず、類も声の主を求めて視線を彷徨わせる。
だが、身近に危険が迫っているような人は見かけられず、どこか釈然としないままに類は再び帰路を辿ろうと足を踏み出す。

あの声は幻聴だったのかと誰もが渋面になった時、第2波は訪れた。

「嫌だあああああ！！」

やめろっ……やめろお！！」

先ほどよりもっと焦った声が響いた。

2度目の悲鳴で、類はついにその主の居場所を悟った。

商店と商店の隙間、商店の影と霧散しない湿気が占める場所にソイツは居た。

顔を血と涙で濡らした少年は、何かを抱えて蹲つまずくっている。

それを見下すのは、派手な色のシャツをだらしなく着た30代ぐらいの男達。

「・・・ヤクザ、か？
大人げねえ」

片方圧勝、ほとんど犯罪まがいの行為を前に類は呟いた。
悲鳴の理由を知った人々は巻き込まれるのを恐れ、見てみぬふりを
して彼らの前を素通りしていく。

そしていつの間にか、辺りにいるのは類と彼らだけになっていた。

高く上った太陽が、類の影を短く刻む。

「まったく、昨今の若者は人助けって言葉を知らないのかねえ？」

自らを柵に上げ、呆れた様にして類は爺臭く呟き、彼らへと歩き出
す。

類の接近に最初に気付いたのは、ヤクザ集団の下っ端の男だった。

「ああん？

何だあ？

まさか俺達に口出そうってわきゃねーよな？」

「何でだ？」

蹲ったままでピクリとも動かなくなった少年を、まるで玩具を失く
した子供の様につまらなさそうに見やる男達に類は聞く。
恐がりもしない類に、下っ端の男が殴りかかった。

「この正義気取りがっ！」

男はバツと飛び上がって、類に向かって拳を突き出す。
それを類は横に移動する事で回避する。

「お・・・ぶべらっ!!」

避けられないだろうと確信して殴りかかった男は、つけすぎた勢いを自身で止められずに類の背後に飛んでいった。

「何で、俺が口出ししないと言い切れるんだ？」

吹き飛んだ男を視界ぎりぎりまで目で追って、類は首を傾げた。何とも間抜けな男へと送られた仲間の視線は、とても冷たいものだった。

「馬鹿か、あいつ。」

相手をよく見るよ・・・こいつあ、三又中さんまたちゅうの片山だぜ？」

ヤクザの1人が類を見て言った。

類は、自分の通う中学校の名前を耳にして、目を細めた。

「只者じゃねえとは思ってたが、まさか三又中の奴とはなー。最近の中学生は恐いなー。」

この前も、どつかの中学生がサツに捕まったって言うしよー？」

「え、こいつ中坊か??」

それにしては、背が高えな。

170はいつてるだろ！」

「どうでもいいだろ、そんな事。」

今問題なのは、こいつが何の為に俺らに話しかけたかつー事だよ！」

「ああん？」

何だよお、てめえ!

俺に難癖つけるつもりか、オイ？」

「だが、正しいだろ？」

「・・・あ、お前の頭じゃ分かんねえか」

「なんだと、コラ」

「あ？やるか？」

「やってやるうじゃねーの！」

「表出る、ゴラアッ！」

「いい加減にしろ」

「「ゴブエツ！！」」

喧嘩をし始めた二人を殴り止めたのは、悪徳商人を絵に描いた様な奴だった。

見るからに上等そうな金色に煌めく着物で全身を包んだ男は、その巨軀きよくをもって他を威圧する。

いつの間にか復活していた、最初に類に殴りかかってきた男が悪徳商人に擦り寄る。

「ボスっ！」

何故このような所に！」

「大事な客の相手をしにちよいつと傍を通ったんでな」

悪徳商人は顎鬚ひげを摩りながら、蹲すまって動かない少年と色々と傷痕の残る足元の部下、そして類を見やった。

周囲の状況を見ることで、起こった事を大体理解したのか、悪徳商人は類を見つつニヤリと笑った。

その厭いやらしい、品位の欠片もない笑みは類の背中に悪寒を走らせた。

「部下をやったのは、君か？」

類は無言で相手を睨みつける。

それを面白そうに観察して、悪徳商人は未だ膝に抱きつく部下に視線を落とす。

「帰るぞ」

「・・・へ？」

ボスが仕返しをしてくれるのだと類を見てニヤついていた男は、面食らって間抜けになった顔を自分の主へと向ける。

「撤収すると言っている。」

今日は面白いものが見れたしな」

くくつと笑って、悪徳商人は類に背中を向ける。

そしてまだ足に纏わりついていた部下を、足手まといだとはかりに蹴り上げた後、首だけを回して類に振り返った。

「この礼は後日させて貰おう。」

今日は見逃してやる」

悪徳商人は大声で笑いながら、大通りに背を向けて裏通りの奥へと突き進んでいった。

一度も瞬きする事なく男の背中を睨み続けていた類は、相手の姿が見えなくなると同時に、視線を少年へと落とす。

蹲った少年の周りには、悪徳商人がそのまま残っていた男達が転がっていた。

類はそれらを傲然と無視し、少年の傍へと近づく。

「何故、助けた」

くぐもった苦しそうな声が聞こえてきた。

「目の前で堂々と殺されそうになってる奴を放つとけるかよ」

照れ隠しに、がりがりと頭を掻きつつ類は答えた。

その類の返答に蹲っていた少年の顔が僅かに上がり、彼の目が腕と髪の毛の隙間から覗く。

「偽善だ。」

俺はお前みたいな奴が大っ嫌いなんだ」

類は彼の目を見て息を飲んだ。

そこには、理不尽な暴力を受けているとは露ほどにも感じさせない強い光があった。

類がピタリと静止したのを尻目に、少年は顔を顰めながら上半身を起こす。

「起きろ」

少年が呼びかけた先には、なんと幼い少女が居た。

この子を守るために、自分の体を重ねて盾にしていたのか・・・と類は感心する。

そんな類を無視して、少年は起き上がった少女だけを気にする。

「しい、大丈夫か？」

類に対する時とは打って変わって、慈愛の満ちた声が少年から発せられた。

「うん。兄は？」

「問題ないよ。」

少年はふんわりと笑って、少女の頭を撫でた。

「お前ら、兄妹か……」

類が驚いた様に呟くと、少年は少女を背後に庇って、キッと類を睨み付けた。

「助けて貰ったなどと、思っていない」

少年は吐き捨てる様にそう言って、少女の手を引き、大通りへと駆け去って行った。

——それが、海里との初めての出会いだった。

とんと後ろから肩に重さが加わった。

とうの昔に相手の気配に気付いていた那美は驚くこともせず、椅子

に座り続けている。

「何を見てるの？」

首に後ろから抱きついたまま、那美が持つ紙を満は覗き込む。

「過去」

もう読み終わったのか、今まで手に持っていた大量の紙をバサリと机に落とす。
綺麗に整えられていたページは落とされた時による風圧で不揃いになる。

「そう。」

でも今まで見ようとしなかったのは、何で？
だいぶ前に鎌から渡されてたんでしょ？」

その問いには答えずに、那美は窓から見える景色へと視線を注ぐ。

「もしかして・・・同情？」

「・・・・・・」

「ねえ、那美。」

何で彼らを取り込もうとしているの？

たとえ敵になったとしても、負ける様な相手じゃないはずなのに」

どうして？と答えを乞う様に、満はキュッと抱きつく力を強めた。

「満が不満とか、そういう訳じゃないの。」

ただ、私の目的に必要なだと判断したからよ」

「僕は必要ない？」

捨てられた子犬の様な表情になる満の頭を、那美はくすりと笑って撫でる。

「大事な弟子を放っておけるわけないでしょ？」

「僕、那美だけは裏切らないよ」

「ん？」

それは私が恐いから？」

からかう様な那美の言葉に、満はぷくりと頬を膨らませた。

「聞いてたんだね？」

「彼がどんな反応をするか気になったからね」

「で、予想通りだった？」

「ええ。」

きつと当初の予定通りになるわ」

満は抱きついていた腕をスルリと外して、肩をすくめた。

「前言撤回。」

「やっぱり恐いや」

「ふふっ・・・それは嬉しい褒め言葉ね」

―― 交差する心 2

ガンツと苛立ち紛れにテーブルを叩く。

綺麗に拳形に凹んだ場所に拳を埋めたまま、海里は唇を噛み締める。

「まだ終わっていない！

終わっていないのにつ！」

普段の彼からは考えられない様な大声を出して叫ぶ。

もう一度同じ場所に拳を叩きつけると、ようやく海里は背後の椅子に腰を落とした。

2度の暴挙によって、テーブルは端をU字型に削り取られていた。足元に散らばる木片を睨みながら、その赤く腫れた手で海里は頭を掻き毟った。

「俺はっ……どうすればいいっ！――！」

今にも壊れそうな声が、小さく響いた。

「おい！鉛筆い！！」

その声に、海里は舌打ちを零した。

普通は入りにくいはずの上級生のクラスに堂々と入り、気安く自分の名前を呼び捨てにするアイツは、海里にとって邪魔以外の何者でもない。

アイツと知り合ったのは、ついこの間の事。

俺達兄妹を残し夜逃げした両親の借金取りに殴られていた所を、奴に助けられた。

もう二度と会う事はないだろうと思っていたら、何の因果か、アイツとは同じ学校だったのだ。

しかもあれだけの身長を持ちつつ、2歳も年下だとは思わなかった。

それからアイツは何かと俺に絡んでくる。

正直、本当に鬱陶しい。

「何読んでんだ？」

類は、海里が黙々と読んでいた本を覗き込んだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「む？」

本の背表紙を見ながら、ぐっと眉間に皺を寄せて類は悩み始めた。

「……なあ、何て読むんだ？」

しばらく悩んで、やっぱり分からなかったのか、類は海里に問う。海里は軽く舌打ちをした後、大きく溜息を吐いてしぶしぶ答える。

「それは、“い”と読むんだ。

……教えてやっただろ？

分かったら、さっさと目の前から消えろ」

「ふーん、じゃあ“いた・せくすありす”って読むのか？

……何か難しそうな本っぽいな。

お前、頭いいだろ？」

中身が性欲に関する話だ、などと類は知る由も無い。

類の感想に、海里は嘲笑を浮かべた。

「お前、馬鹿だろ」

「よく言われる」

侮蔑を込めて海里が放った言葉は、類の経験というモノによって受け流される。

再び深いため息を吐いた海里を、類はしてやったりとばかりに笑った。

「なあなああ駄貰っ！

この後のHRで終わらだろ？！」

「……だから何だ」

類の言わんとしている事をなんとなく理解して、海里は素っ気無く返す。

「どうすんだ？」

「帰る」

即答する海里に、がつくりと頂垂れる類。

しかし次の瞬間、類は満面の笑顔を浮かべる。

それを見た周囲の女子は顔を真っ赤にしておろおろするが、海里にとっては嫌な感じしかない。

「………一体何を思いついた？」

類はそれには答えず、また後でと笑って教室を出て行った。
残された海里は、再び溜息を吐くのだった。

放課後、類の笑みの意味がようやく分かった。

急に周囲が騒がしくなったと思ったら、何故か女子集団が海里の周りを囲っていた。

逃がさない様に隙間なくきっちり作られた円は、海里を追い詰める様に徐々に狭まっていき、最終的には揉みくちやにされながら、ある方向へと連れ去られる。

「ちよつ、待て！

アイツだな、アイツの命令だろっ！！

・・俺は行かない、って聞けえ！」

情けない悲鳴を轟かせつつ、着いた場所はカラオケボックスだった。

へとへとになった海里が怨めしそうに見た先には、女子に囲まれ勝者の微笑みを浮かべる類の姿があった。

「お前、後輩のくせにつ!!」

「俺は先輩の為に女の子を集めたんですがねえー」

“先輩”の部分をやたらと強調して、類はニヤニヤと笑い、海里の反応を伺う。

海里は眉間にくつきりとした皺を寄せる。

「お前の価値観と俺のそれとを一緒にするな。

この女たらしめがっ!」

「俺は、女にモテるといふ才能の有効利用をしてるだけだぜ?」

「お前の才能の使い道など、俺にはどうでもいい事だっ!

今この瞬間に、家に奴らが来る様な事があつたら……!!」

ぐつと拳を握り締めて苦渋の表情を浮かべる海里を見て、類は笑顔を消した。

「俺、高校どこに行くか決めてるんだ」

「……は?」

唐突すぎる類の言葉に、海里は戸惑う。

「瀬戸際って知ってるか?」

「瀬戸際……あの不良が集まるっていう?」

「あそこ、近辺でも有名な龍神っていうチームの溜り場なんだよ」

「お前がその高校に行く事と何か関係があるのか?」

先の見通せない話に海里は苛立ちを露わにする。

「俺、今の龍神の頭に誘われてんだ。
お前次の頭になってみないか、って。

・・・なあ海里、お前も一緒に行かないか？」

「断る」

一も二もなく即答した海里に、類は目を見開く。

「おいおい、こっちは真剣なんだぜ？

ちよつとは考えてみるとか出来ないのか？」

「今、家の働き手は俺しか居ないんだ。

だから、そんな事をやっている暇はない」

海里の返答に、がつくりと類は項垂れた。

周りの女子達が、ここぞとばかりに類に群がって慰めようと言葉をかけている。

「家で待つてる奴がいる。

俺は帰る」

要件だけ告げると、海里はそそくさとその場を後にした。

・・・この時はまだ予想だにしていなかった。

俺が龍神に入る事になるなんて・・・

玄関から鳴り響くチャイムの音に、海里の意識は浮上した。

薄ら開けた視界から見える景色に、どうやら椅子に座ったまま寝てしまっただけと判断する。

うるさく鳴り続けるチャイムに苛立ちながら、海里は玄関へと向かった。

そしてドアを開け、そこに立っていた人物に目を見開いた。

「なんで、お前がここに……」

―― 交差する心 3

「こんばんは、鉛筆先輩」

いつかの様に、読めない笑みを浮かべてそこに立っていたのは、那美だった。

啞然とする海里の反応を予想していたのか、クスリと笑う。

「なんで、お前が俺の家を知っているんだ」

何かを見極める様にスツと目を細め、尋問口調で海里は問う。

そんな彼に対して那美は、後ろで手を組み、少し背伸びをしながら身を乗り出した。

自然と近くなる互いの顔の距離に、ビクリと海里の体が反応する。

「苦しみました？」

耳元で愛しげに紡がれる声と対照的に、那美からは紛れも無い殺気が発せられる。

その濃厚すぎる殺気に、海里の体は硬直して動けなくなる。

「な、にを・・・」

いつの間にか、喉がカラカラに乾いて声が上手く出ない。

「私の申し出を断って、後悔しました？」

予言したはずですよ。

貴方は望んでこちら側に来る事になる、と」

そう言つて、那美は殺気を消し去り、海里から身を引く。

それと同時に強張っていた体から力が抜け、海里はその場に膝をついた。

青ざめて見上げた先には、月を背にして立つ彼女の姿があつた。

「俺は・・・お前の所になど・・・」

弱々しく、それでもまだ反論を重ねる海里を、那美は笑う。

「後悔しない様に、貴方の目で確かめてから返答すべきだわ」

そう言つて那美は、常人の目には捉えられない様な速度で拳を振るう。

避ける事も敵わず腹に一撃喰らつた海里が最後に見たものは、子供のスニーカーだった。

ドサツという音を立ててうつ伏せに倒れ込んだ海里を見た那美は、自身の背後に振り返る。

「満、運んで」

「了解！」

那美の命令を受け、可愛い笑顔と共に満がハキハキと返事を返す。

よっという掛け声と共に、海里を米俵のごとく肩に抱きかかえ、彼はふと東の方角に目を向ける。

「那美、あつちはいいの？」

不思議そうに首を傾げた満に、那美はよく気付きましたとばかりに無邪気な笑みを向ける。

「・・・ねえ満、やって欲しい事があるんだけど？」

無意識に溜息を吐きつつ、それでも満はおずおずと頷いた。

周辺にいくつかある大学の、学生を対象とする賃貸マンションが互いに競う様にして立つ場所に、類は来ていた。

過去の数少ない記憶を頼りに、彼は1つのマンションを見上げる。それは周囲の物よりいくらか古めかしい佇まいで、ある種の貫禄を漂わせていた。

類は、これから立ち向かわねばならないものを想像して眼光を鋭くした。

そんな彼に近寄る小さな影があった。

「ねえ、お兄さん」

甲高い声に類が右向くと、そこには1人の少年が立っていた。

こんな真夜中に出歩いている少年に少しばかりの違和感を感じて、類は体を強張らせる。

「お兄さんは、ここに住んでる人？」

少年の目深に被った野球帽が、はつきりと顔を視認する事を邪魔す

る。

「……………ここに住んでいるのか？」

古いマンションを指差して逆に問えば、少年は首を横に振る。

「僕、あっちに住んでるんだけど、鍵を忘れちゃって入れないんだ
！。

お兄さん、鍵持ってるかなって。

持ってたなら、一緒に入れるかなって思ってた。

……………でも、お兄さん、僕と同じマンションじゃないんだね」

残念だなあと肩を落とした少年に、まさかこんなガキが襲ってくる
訳ないかと類は警戒を解いた。

機械化が進むこの御時世である、部屋の鍵がオートロックだという
事も有り得ないことではない。

少年の言い分を、一概に嘘と言って切り捨てる事も出来ない。

1人納得していると、少年が何やら呻き出した。

手が顔にある辺り、もしかしたら泣いているのかもしれない、と類
は内心焦る。

そして、先程の会話の中でちょっと睨みすぎたかもしれないと思い
至ると、今度は目に見えて焦り始めた。

「おいっ?!」

ぐずぐずすと鼻をすする音が引つ切り無しに漏れ聞こえる。

やはり泣いていたのか、と類は情けない表情でオロオロしていた。

「あの、ね……………ぐずつ……………さっき、お化け……………見たんだ。
だから、僕……………恐くつて……………ぐずつ」

「お化け？」

自分の所為ではない、と安堵すると同時に少年の言葉に何やら引っかけかりを覚えた。

「うん・・・赤い服を着たお化け。

白い、大きな袋を持ってたから最初はサンタクロースかと思ったんだ。

でも顔に・・・」

「顔に？」

「お面、してたんだ。

狐の、お面」

少年のその言葉を聞いた瞬間、類は古いマンションへ向かって駆け出した。

背後で慌てたように何かを叫ぶ少年の声が聞こえたが、そんなのは今の彼にとってどうでもいい事だった。

とてつもない胸騒ぎがする、そんな思いに突き動かされるようにして彼は目的の部屋へとひた走る。

古いが故の不完全なセキュリティ態勢が幸いしたのか、難なくその部屋に類は辿り着く。

まずは、ドア横にある呼び鈴をひたすら押し捲る。

次にノブに手を掛けつつドアを叩こうとして、類はドアに鍵が掛かってない事に気がついた。

「海里っ！！！」

壊れるぐらいの勢いでドアを開け放つと、類は慌てて玄関に駆け入り、靴を脱いで部屋の主を探し始める。

しかし、一番奥の部屋に入ると同時にピタリと動きを止める。

「何だ・・・これ」

その部屋の光景に、類は息を飲んだ。

床に散乱するガラスや木片、そして破損した状態であちらこちらに転がる家具——その全てが、ここで起こったことを物語っていた。

「・・・っ!!」

ギリツと齒軋りをして、類は目に憎悪を浮かべる。

「そうか・・・そういう事か・・・・・・那美い!!!」

ここで初めて、類は今回の件に那美が関わっている事を知ったのだ。
った。

「海里、お前は目的があるはずだろっ！」

何故俺等を・・・俺を裏切るような真似をっ！」

既に一部を削り取られ、傾いていたテーブルを類は殴りつける。
理不尽な力を加えられたテーブルは、かろうじて保っていた均衡をも崩し、地響きを立てて落ちた。

「何故、那美に・・・」

海里は那美の味方になってしまったのだと、類は考えていた。

そしてその覚悟として、これまで過ごしてきた場所を破壊したのだ
と思っていた。

その考えでいくと先程の少年の発言に矛盾が生じるのだが、この時
の類にはそれに気付く余裕がなかった。

ただ盲目的に海里と、海里を裏切らせた那美とに憎しみを燃やして

いた。

「ねえ、那美」

役目を終えて戻ってくるなり満は、横に座って窓の外を見続ける彼女に呼びかけた。

今は鎌が寄越した車で、会社へと向かっている。

「何」

彼女には似つかわしくない、とても弱すぎる返事に満は大丈夫？という問いを飲み込んだ。

常人とは掛け離れた洞察力を持つ彼女の事だ、満を類に会いに行かせた時点でこれから起こるであろう事を既に予測し終えてしまっているであろう。

「……何でもないよ」

「そう……もうすぐ着くわ」

「そうだね」

自然と、満と那美の手が重なった。

何事にも完璧な彼女がこんなにも自身の弱味を曝け出すのは、自分と鎌に対してだけなのだ。満は知っていた。

誰よりも長く一緒に居た鎌と、誰よりも近い存在である満。

恋愛対象などという酔狂で明確な関係はないけれど、むしろそんな

モノを超えた信頼関係が互いの間に根付いている事に満は深い満足感を覚えて笑んだ。

ぎゅっと、重ねた手に力を込める。

それを感じたのか、那美は車窓から視線を移す。

「彼らもこんな関係だったのかも知れないね」

「そうじゃないと、困るわ」

ぽつりと零した言葉に、自嘲的な笑みを浮かべて那美は言った。
そして再び車窓を眺めて、呟く。

「そうでなくちゃ困るのよ、類……」

―― 交差する心 4

「・・・・・・・・っ!」

意識が浮上するなり、海里は勢いをつけて飛び上がった。

清潔な真っ白いシーツに包まれた柔らかいベッドから、床へ降り立つ。

しっかりと自分の足で床に立っている事を確認すると自身を落ち着ける様に息を吐いて、海里は冷静に辺りを見回した。

彼がこれまで寝ていたベッドと平行に幾つかの同じ様なベッドが並び、それを仕切る為の物なのか、それぞれの間の壁には灰色のカートンが括られている。

向かい側の壁には、これまた同じ様にベッドが並んでいる。

海里は向き合うベッドの列の間を通って、部屋の端へ行く。

そこには4つのデスクが置かれており、ついさっきまで誰かが居たのか書類が乱雑に散らばっている。

特に意図する事なく、海里は書類の束の一番上の紙をすくい上げた。

明らかに彼の物と思われる身体データが書かれており、最後の注釈には“V・Pに全権委任”と汚い字で書かれている。

「・・・・・・・・」

自分の事が全て知られている事にゾツとして、海里はその紙をくしゃくしゃに丸めて潰す。

ボール状になった紙くずを近場のゴミ箱に投げ捨てると、彼はデス

ク横にある茶色いドアに歩み寄った。

「待っているのは地獄か、天国か」

ドアノブに手を掛けて、海里は小さく呟く。

・・・とその時、勢いよくドアが内側に開き、海里の頭にドアがめり込んだ。

予想以上の力で開けられたのか、ドアがぶつかった事による海里の勢いは止まらず、そのまま壁に飛ばされて激突する。

「えっ、今何か手ごたえが・・・って、あああ!!」

頭から噴出す血で視界が覆われている海里は、女の声を目に捕らえる。

「どうした？」

今度は、女と対象的な冷静かつ落ち着いた男の声が聞こえた。

「いやっあのっ、不可抗力という奴ですねっ・・・!!」

「ったく、だからいつも力加減に気を付けろって言っているだろうっ！」

「す、すいません・・・」

ゴム製品と床が擦れ合う様なキュッという足音をさせて、誰かが海里の方へ近づいてくる。

「おい大丈夫か、少年。」

すぐに治療してやるからな、安心しろ」

穏やかな声で海里にそう言うと、男は背後に向かって叫ぶ。

「消毒液とガーゼ、それに針とか、その辺もろもろ持って来いっ！」

「え〜!!」

もろもろって、分かるわけじゃないですかぁ!」

「うるさい、さっさとしろっ！」

一体誰がこの状況を作り出したと思ってるんだ？」

「そりゃ〜アタシですけどぉ・・・」

「早くしないと、あれにするぞっ！」

「あれって・・・ひiiiiiiii!!」

わ、分かりましたから、あれだけは勘弁してください!」

「分かったら、早く持って来い!」

男と女の言い合いをぐらぐらする意識の隅で捕らえ、どうでもいいから早く治療しろと海里は心中で毒づいた。

それが暗に伝わったのか、以降の治療は無言の中、素早く行われた。治療が進むにつれ、海里の視界が晴れていく。

ふと、海里はドジっていた女を視界に捉えた。

女は海里が自分を見ている事を知ると、一気に目を輝かせる。

「・・・?」

その反応の意味が分からず眉間に皺を寄せると、途端に彼女は泣くのを必死に我慢する様な表情になった。

ますます分からず、海里は目を泳がせる。

「ああ・・・気にするな。」

少し感傷的になっているだけだ」

海里の反応で状況を悟ったのか、黙々と治療を続けていた無精髭ぶしょうひげの男が言った。

女はチラリと男の方を見ると、一礼をして部屋から駆け去っていた。

「・・・よし、こんなもんだろ」

包帯の上を軽く叩き、男は終了を宣言する。

そして立ち上げると、胸ポケットから煙草を取り出しつつ呟く様に言葉を洩らした。

「耐えて、耐えて、ようやく手に入れた物がこれじゃあ、あんまりだよなあ」

口に咥えた煙草にライターで火を付け、煙を吐き出す。

「・・・?」

「いや、こつちの話。

ところで、お前が起きたら連れてくる様に言われてるんでな」

男はそう言つて、未だ半分以上残っている煙草を惜しげもなく灰皿の上で磨り潰し、よっこいせーと親父臭いセリフと共に海里を抱え上げた。

「お、おいつ?!」

ひよろりとしたおっさんだとばかり思っていた男に抱え上げられ、ぎよっとした海里は思わず声を上げる。

男はシニカルに笑うと、軽い軽いと言って部屋から出る。

「どうせ血が足りなくて、よろよろすんだろ？」

俺の目の前にそんな奴がいると困るんだよ。

あと、ちよつと用もあるしな。

まあついでだ、気にすんな」

男は海里が遠慮していると思ったらしく、そう言って豪快な笑い声を上げる。

肩に担がれた海里の頭は自然と下になり、その所為で逆流した血が折角巻いた包帯から染み出していたりもするのだが、男は気にしないらしい。

この男に何を言ってもおそらく無駄というもののだろうと、早々と諦めた海里は黙って苦痛を耐え忍ぶ。

「失礼する」

肩にぶら下げられてから何分後だったろうか、そろそろ我慢の限界という時に男が足を止め、声を発した。

ガチャリという音がしたかと思った次の瞬間、海里の視界は反転する。

急に降ろされた為か、これでもかという程に溜まっていた血が頭から去り、くらりと海里はよろめいた。

床へと一直線に向かう海里の体を支えたのは、これまで彼を担ぎ上げていた男だった。

「ああ、すまん。

いつも、こいつ等の相手ばかりしてたから、普通というのを忘れち

まってた」

はははと空笑いをして、男は顎に生える無精髭を撫でた。

「樹、^{いつき}ご苦労様」

いつの間にか海里と男の目の前に満が立っていた。

満はにこやかに笑って、樹と呼ばれた男の労をねぎらう。

「アイツにも宜しくな」

「分かつてる」

そんな短い会話を交わして、男は部屋を出て行った。

ドアがきちんと閉められた事を確認した満は、自身を睨みつけて警戒心を露わにしている海里に向き直る。

そして苦笑を投げかけると、言った。

「俺、なんで睨まれてるんだ？」

「しらばつくれるな。」

あの時、お前も一緒に居ただろう」

海里が冷笑とともに、事実をつき付ける。

「へえ？」

気付いていたんだな。

まあ、そこまで馬鹿じゃないか」

「・・・何故お前とアイツが一緒に居た？」

目覚めてからずっと疑問に思っていた事があった。

最後に見た靴の正体がこの満だとするならば、何故あの時那美が居たのか？

そして那美が以前言った、“私の元へ来てください”という言葉。あれが海里的の解釈した通り、“私の仲間になれ”という意味なのだとしたら……

今、海里の中で、これまでの全ての事象が一つの結論へと帰着している。

しかしそれは彼にとって、あまりにも受け入れがたいものだった。

そんな、拒絶反応と戦い続ける彼の思考を止めたのは、誰であろう満だった。

「アイツなんて、恩人に対する言葉じゃないな。

……次に言ってみろ、殺すよ？」

ギリリと満の目が光り、外見にそぐわない殺伐とした空気が海里的身を縛る。

汗がじわりと滲み出る。

海里的の目に何を見たのか、しばらくして満は満足した様に視線を逸らした。

と途端に海里は自分の身が軽くなった様に感じた。

「さっきの問いに答えるのは、僕じゃない。」

満は海里に背を向けて、入ってきた方とは別のドアへと歩み寄る。その光景に、海里はデジャヴを感じた。

「真実を知って苦しめ。

そして先程発した彼女に対する侮辱の咎とがを受けるがいい」

満はそう言つて凄惨な笑みを浮かべ、歩み寄つたドアを開け放つた。

— 交差する心5（前書き）

こんな中途半端な状況で何故改訂しようと思ったのか、自分でも謎すぎます。

本当に申し訳ありません！

交差する心、とりあえず終わらせます！

改訂すら中途半端でごめんなさい！

交差する心を終わらせた後でやる事にします！

ドアの向こうは、以前にも来たことのある社長室だった。

「来たね」

そう穏やかな声を発したのは、執務機の椅子に腰掛けた“鎌二”だった。

彼の右斜め後ろには、“立文”が屹立している。

まるで主人と従者の様な配置の2人を見て、入ってきた海里が眉を顰めた。

その反応を見て、“鎌二”がクスクスと笑う。

「・・・ああ、そういえばそうだった。

さて、この状況をどうする？」

完全に面白がる様な口調で、“鎌二”は執務機の左端に腰掛ける彼女を見る。

「とりあえず自己紹介でもすれば、嫌でも納得するんじゃないかしら？」

視線を送られた那美は、つまらなさそうに足をぶらつかせて答えた。

「そうかい？」

「・・・じゃあ改めまして、私は長島鎌たちはなです。

表向きには人事部部长ですが、実は立花株式会社の社長をしています。

そして、こちらは立花律。
私の秘書だよ」

鎌が律を紹介すると、彼は海里に腰を折ってみせた。

「長島………そうか、あんたらグルだったのかっ！」

緊張と警戒で元々鋭かった海里の視線が、更に鋭くなる。

「うわっ！納得するどころか、彼怒っちゃったよ？」

鎌がおどけて言う背後で、律が盛大な溜息を洩らす。

「そこは兄さんの人徳の問題じゃない？」

「……たまに酷い事言うよね、那美は。」

「これでも一応社長なんだけど」

「ふうん」

「何かな？その明らかに哀愁を込めた視線は」

「ちよっとお2人共っ！目の前の状況放ったらかして、言い合いするの止めてください！」

本当に分かってるのですか、この状況！」

「律、気付かないのか？」

この何ともいえない微妙な空気を払拭する為に、那美はつまらない言い合いなんかやっているんだよ」

馬鹿を見るかのような目で、満が律を見やる。

「そうそう。ねー、兄さん」

「なー、那美」

「このシスコンと那美狂いめッ！」

それではどうにか出来る訳がないでしょう！」

満の言葉を受け、微笑みを交わし始める兄妹に律は地団駄を踏む。本気の満に対して兄妹は思いつきり律をからかっているだけなのだが、彼はそれに気付かない。

そして、唐突に那美は海里に向き直る。

さっきまでの軽々しい空気をガラリと変えて見やると、海里は今にも飛び掛ってきそうな怒りを目に宿していた。

「就職した貴方は一体どちらに付くつもりかしら？」

「ここまでされて、俺がこの会社につくとも思っているのかっ！」

「あら？」

昨日の事以外で、私は貴方本人に何かしたつもりはないけれど？」

飄々と言つてのける那美に、海里は齒軋りをする。

そんな2人の光景を見て律は、また始まったかと心中で再び溜息を零した。

これは那美の癖だった。

味方ではないと判断した相手はどこまでも怒らせて、怒りに我を忘れて心に隙が出来た瞬間、一気に手のひらを返して叩き落とす。

そして様々な情報を用いて導き出した、その者にとっての天国と地獄を叩き落されて茫然自失とした相手に付きつける。

最後に、相手に選ばせるのだ・・・天国か、地獄かを。

相手の精神を崩壊させかねない那美のやり方は、周りの者をいつもハラハラさせる。

こんな状況で平然としていられるのは、鎌と満ぐらいだろう。
律はこの後を予想して、今捧げられんとする生贄を見る様な目で海里を見ていた。

「ずいぶん仲間意識が強いね」

「俺はただ・・・類との約束が・・・っ！」

海里が悔しそうな顔でそう言った瞬間、那美の目がギラリと光った。

「そう、約束・・・約束ね。」

もし、その約束を無駄に使われていたとしたらどうする？」

「・・・は？」

「約束自体が無駄だったら、どうするの？」

「そんな事、あるわけない。実際に椎奈しいなは・・・」

海里の脳裏にあの日の事が甦った。

類にカラオケへ連行された後、海里はすぐに家へと帰宅した。

しかし、強い付加が掛けられたのだろう、留め金の外れボロボロになった無残なドアを見て、彼の顔から色が消えた。

「しい！」

とうに帰って来ているはずの、小学生の妹の姿を探す。

「お兄ちゃんっ、危ない！」

妹の叫ぶ声が聞こえ、海里は後ろを振り返る。

そこには、金属製のバッドを振り掲げた中年の男が立っていた。スローモーションの様にゆっくりと見えるそれは、海里の頭に吸い込まれていく。

「ぐうあ」

「いやあああああああつ！！！！！」

頭に激痛が走り、海里は玄関に倒れこんだ。

だが根性で、意識は手放さない。

ぐらぐらする頭を必死で動かして妥協策を考える。

再び起き上がった海里は、妹を取り押さええている男達に襲い掛かった。

「しいを放せえええ！」

バッドで殴られても意識を失わないどころか反撃までしてみせた海里に狂気を感じたのか、男達は彼の妹を抱えたまま後ずさる。

海里は妹の片腕掴む男を蹴倒し、体全体を使って、もう片方の腕を掴む男に押し掛かった。

喧嘩のけの字も知らなかった海里には、その方法しか思いつかなかったのだ。

「しい、逃げろっ！」

「こいつ・・・っ!!！」

男と共に倒れこみつ、海里は妹に向かって叫ぶ。

それで、ようやく正気を取り戻した男達が一斉に未だ暴れている海里に向かう。

全てが動き出したその時、ぱしゅつと気の抜けた音が聞こえた。

焼け付くような激痛と共に海里の右足から血が噴出す。

「ぐあああああつ!!！」

「逃げられたら、困るんだよねえ」

倒れこんだまま起き上がれない状態の海里が睨み上げた先には、サイレンサー付きの銃を向ける金の着物の男が居た。

男は銃を持っていない方の手で、妹の両手を彼女の頭上で1つにして握り、拘束していた。

「根性あるねえ。俺の配下にならないか？」

「・・・なったら、妹を放してくれるのかっ」

海里の言葉に、男は本当に可笑しそうに笑う。

「すまんが、このガキは奴隷にするつもりなんでなあ」

汚い顔で男は笑った。

そして、おもむろに暴れる妹の首元に顔を近づけると、フツと息をかける。

「いい女になると思わないか？」

「お兄ちゃん！」

「しいを放せっ！！誰がお前の仲間になんかなるかよ！」

そう言つて、自身を押さえつける男達に反抗して暴れだした海里を襲つたのは、肩に銃弾が突き抜ける痛みだった。

「うああうっ！」

「・・・うるさいなあ。」

おい、そいつは放つとけば死ぬ。とつとと帰るぞ」

「お兄ちゃん！！」

「しいなああああああああ！！！！」

血の海の中心で倒れこみ、海里は妹の名を呼ぶ。

しかし返ってきたのは、ドアが無理矢理閉められる音だった。

1人、残された部屋で海里は泣きじゃくった。

「くそつくそつくそっ！」

せめて類ぐらい強ければこんな事にはならなかったのに、と自分の弱さに心底苛立つて彼は床に拳を打ち付ける。

「ぐっ・・・はは、俺このままじゃ死ぬな」

広がり続ける血の範囲を見て、海里は笑った。

あちらこちらが痛すぎて、逆に痛みを感じなくなってきた。

「俺がもし生きる事が出来たら・・・しい、お前を助けるために全力を尽くそう。」

生きる事が出来るなら・・・」

海里の視界が大きく揺れる。

「銚葺っ！！！」

ドサリと海里の体が完全に血の海に沈む時、類の声が聞こえた。

そこからの記憶はないが、おそらく類が救急車を呼んでくれたのだろう。

再び目覚めた時、海里は病室のベッドに居て、隣には海里が座っていたのだから。

「俺は・・・生きているのか」

「・・・銚葺！」

啞然と呟く海里に、類が泣きそうな顔を向ける。

「・・・類」

「ごめん。ごめんで許される様な事じゃない・・・けど、ごめん。俺知ってたのに！狙われるかもしれないと分かっていたのに！俺が引きとめた所為だ・・・」

類の目から流れ落ちる涙を見て、海里はその双眸を閉じた。

「どうせ同じ事になっていた」

「・・・銚葺？」

「俺は弱い。・・・なあ、俺を龍神とやらに入れてくれないか？」

「銚葺？」

「蛇の道は蛇。もしかしたら、しいを見つける事が出来るかもしれない

ない」

再び開いた海里の目には確固たる覚悟があった。

「もしお前が俺を入れてくれるなら、俺はお前の為に何でもしよう」

「鉅葦……」

「海里でいい」

海里の意志に迷いが無い事を彼の表情で悟った類は、膝の上の拳を握り締め、言った。

「……海里、俺もお前が入ってくれるなら全力を尽くすと約束する」

「ああ……約束だ」

こうして海里は龍神の一員となったのだった。

―― 交差する心 6

「あれが無駄になるだど・・・？」

海里が怒りのあまり、ふるふると震えだす。

「そもそも、妹さんを助ける為に龍神に入って類に付き従う事を約束するだなんて、本末転倒だと思わないのかしら？」

「なんでそれを・・・っ！！」

・・・では聞くが、あの状況で俺に何が出来たというんだ！」

那美は蔑むあざむような視線を海里に投げかけ、端的に言う。

「私なら誰の力も借りずに、復讐しに行くわ」

さらりと出された答えに海里の目が見開かれる。

「そ、それは強いお前だからこそ言える事だろう！」

「確かに貴方は弱い。」

だから自分の目的の為に他人を使う事には、私も大賛成。
でも、私と貴方には決定的な違いがある」

「・・・なっ」

「他人に付き従う事を約束してしまった貴方は、自分の目的に集中する事など出来なかった。」

今さっき私が貴方の仲間意識について聞いた時、貴方は真っ先に類との約束を掲げたわよね？

それこそ妹さんを探すという目的を一瞬でも忘れた証拠よ」

「しかし、あの約束はっ・・・」

「まだ言い訳をするつもり？」

・・・そうね、約束をした当初は、確かに妹さんの事があったかもしれない。

でも、類と過ごす内に、龍神の幹部としてある事が目的にすり替わってしまったのでしょうか？」

類はぐつと言葉に詰まった。

違う、とは一概には言えなかったからである。

実際に少し前まで、“類”という存在がそこに在るからこそ、俺は龍神にいる”などと考えていたりもしたのだ。

「満、彼女を連れて来てくれる？」

押し黙った海里を尻目に、那美はドア近くに突っ立ったままの満に声をかける。

「分かった！」

那美に頼まれた事が嬉しいのか、目をキラキラさせて返事を返した満は社長室を出て行く。

立ったまま動かない海里は、自分を責めている様に那美には見えた。一般人が今の彼を見たなら、きつと同情に値すべきだと判断しただろう。

だが生憎相手は、過去現在において一般の高校生とは掛け離れた生活を送ってきた那美である。

現に、胸くそ悪いわねと彼女は海里を見て思っていた。

その原因はきつと、彼女が数年前に捨て去ったモノを彼が未だに抱えているからだろうと那美は納得する。

過去の自分を見ているかの様な光景を、これ以上見たくなくて彼女は目蓋を降ろした。

静まり返っていた所為か、しばらくして聞こえたノックの音がやけに響いた。

すこし開いたドアの隙間からひよっこりと満が顔を出す。

「連れてきたよ」

満と一緒に入ってきたのは、さっき海里が見た女だった。

海里を見るなり、泣きそうな顔をして走り去って行った女・・・そのぐらいの印象しか、海里には残っていなかった。

ただ疑問に思うのは、何故彼女を連れて来るように那美が言ったかという事だった。

「・・・ねえ、海里。」

あの子が誰か、分かる？」

女是那美の言葉にぎゅっと口を引き結び、何かを懇願する様に赤く腫れた目で海里を見る。

しかし海里はそれを冷めた目で見るだけだった。

——と、そんな状況を見て、押し殺した笑い声が部屋に響いた。

「兄さん、ここからが佳境なのにー」

那美が責めるような目で、笑い声の主を見る。

「はははっ・・・ごめんごめん。」

本当に可哀想だなんて思ったら、つい・・・」

「雰囲気ぶち壊しですよ」

鎌の言葉に、思わず唸る律。

それらを呆れた様に見て、那美は海里へと再び視線を戻す。

3人のやり取りを聞いていたのだろう、海里の目が徐々に驚愕の色を帯びてゆく。

「ま、さか」

零れ出た言葉に、那美は笑みを零す。

「やっと気付いたようね？」

・・・彼女の名前は銛葦椎奈。

正真正銘、貴方の妹さん」

「・・・しいな？」

那美の言葉を受けて、海里が恐る恐るその名を呼ぶと、相手は海里の視線から逃れる様に顔を俯かせる。

そして再び涙を散らせて顔を上げると、海里の胸へと飛び込んだ。

「お兄ちゃあぁんっ！

どうして気付いてくれなかったの？

私、ずっと待ってたのに！」

椎奈は、握った両拳で海里の胸を何度も何度も叩く。

「酷いよぉ・・・ひどいつ！」

泣きながらも暴れ続ける椎奈を、海里はぎゅっと抱きしめた。

「・・・ごめん」

「酷い・・・ひどいいい」

海里が強く抱きしめれば抱きしめるほど、抵抗は弱まっていき、最終的には海里に抱きついて泣き出した。

自分の胸からくぐもって聞こえる泣き声を耳にする度、海里の顔が辛そうになってゆく。

「本当にすまなかった」

「死んじゃったのかと、思ってた！

ずっとずっと、那美さんから聞くまでっ！」

海里はその言葉で、顔を勢いよく上げた。

自分が今何処にいるのかを思い出したのだ。

そして、椎奈を抱き抱えながら那美の方へと顔を向け・・・その目を見開いた。

見た事のない程に穏やかな表情を浮かべて、那美は2人を見ていたのだ。

——もつとも、それは一瞬の事で、海里が見ていると分かった瞬間に元の読めない笑顔へとすり替わったのだが。

「さて、海里。

貴方に選択権を与えるわ」

「・・・何のだ」

那美の言葉に、得体の知れない危機感を抱いた海里の声が一段と低くなる。

それに声を立てて笑うと、那美は続けて言った。

「椎奈はね、私の元にずっと居ると契約を結んだの。」

・・・だから、海里が椎奈と一緒に居たいのなら、貴方もここに居なければいけないわ。

それとも、彼女を置いて出て行く？」

「自分の妹と会うのに、お前の許可が必要だと？」

怒りを滲ませた声音が海里の口から発せられる。

「椎奈は、このビルに住んでるの。」

・・・意味、分かるでしょう？」

社員でなければ入れないセキュリティの厳しい場所に妹がいるという事は、社員で居続けなければ椎奈にも会えないのだと海里は理解する。

実はこの時、那美は言外に過去の腹黒い計画を示唆していたのだが、海里がそれに気付くのはもっと後になってからであった。

「・・・どうする？」

私は別にどちらでもいいわよ？」

貴方がこちら側についても、あちら側についても」

そう言いつつも既に結果は見えているのだろう、彼女の目は期待で煌めいていた。

弱点を巧妙に突かれてチェックメイト寸前の海里は、それでも拳を握り締めて代案を模索する。

「お兄ちゃん・・・」

力の緩んだ腕の中、椎奈は不安そうに自身の兄を見上げる。

「お兄ちゃん、私の事は気にしないでいいよ。
本心から選べる方を選んだらいいよ」

椎奈のその言葉がだめ押しとなった。

ぎゅっと両拳を握り締めると、海里は悲壮な決意を胸に那美へと告げる。

「分かった。

社員のままでいよう」

椎奈の顔は、その言葉ではち切れんばかりの笑みを形作る。

対して、海里の顔は暗い。

ごめん、類。

今まで散々妹を苦しめて来た俺が、これ以上不幸にする訳にはいかないんだ。

だから、俺はお前を選ばない……………

双眸を閉じ耐える様な顔で、心に浮かぶ親友に別れを告げる。

海里がようやく心を固めた頃、立花株式会社ビル前に2人の男が立っていた。

1人は何とも可愛らしい顔つきをした童顔な少年で、もう1人は凶悪犯と間違えそうになるほど人相の悪いドレッドヘアーの青年だった。

「まさか、こんな所に行き着くとはね……ホント放棄したままにしなくて良かったね、静」

「……ああ」

「どうして落ちこぼれの高校生なんかに、この会社は関わろうとしたりたんだろうね？」

「直接聞くのが一番ではないのか？」

「うん、そうなんだろうね。」

「……でも、簡単に答えてくれるかなあ？」

スツと細めた目に剣呑な光を灯して、省吾は口元に弧を作る。

「俺らには、社会の干渉を良しとせぬ掟がある。

長年守ってきたそれを破らせた奴らは何とも天晴れ。

しかし……」

「そうだね。類1人じゃあ、やっぱり不安だしね」

「ああ」

「彼らの腹には、たくさん毒が詰まってそうだよ。

風穴を開けてやれば、たぶんたくさんの毒が流れ出るね。

そうしたら世間はきつと、責任を求めてその毒を彼らの皮膚に掛ける。

胃液が漏れ出た時みたいに、溶けるかなあ？

それとも血が大量に出た時みたいに、青白くなつて冷えるかなあ？」

まるで謳^{うた}う様に、恍惚とした表情で言葉を紡いだかと思えば、次の瞬間には腹を抱えて笑い出す省吾に静は呆れた視線を向ける。

「お前もやつと本気になったか」

「うん、気に入らない。

気に入らないね。

ははっ、また後日伺う事にしようか？」

「・・・・そうだな。」

おそらく今のお前では、ビルごと破壊しかねない。

それに、類も居らん。」

くると、ビルに背を向けて歩き出した省吾を追う様に静も歩き出した。

— 交差する心 6（後書き）

「交差する心」の章はこれで終わりです。

—— 5章 堕ちる時1（前書き）

以前から色々突っ込んでくださるF氏から

「あんまり変わってない」の一言を頂きました・・・

ので、もう更新してしまいます！（くっそーーーーー！）

—— 5章 墮ちる時 1

よたりよたりと、横に揺れ、縦に揺れて、類は歩く。
彼の目は虚無と憎悪で満たされ、現実を映してはいない。

今、彼が訪れているのは、学校だった。

しばらく見ぬ内にあまりな変貌を遂げてしまった彼を一目見るや、
触らぬ神に祟りなしとばかりに彼と親しかったはずの生徒達が疎ら
に散る。

ふと、自分の進む先に立ち去るうともしない人影があるのを視認し、
類は立ち止まった。

「久しぶりに学校に来たと思ったら、なんてザマしてんのさ？」

人影——省吾が腰に手をあて、がっかりだとしても言いたげな口調で
ズケズケと言いつつ。

それを聞いた周囲の生徒が、ひいっと情けない声を上げて類に振り
返るが、本人は動きを見せない。

「二人共、脅してきたぞ」

省吾と類が向き合う中、これまた空気を読もうともしない男がアツ
サリと割って入る。

「そ、ちなみに何処の教室確保したの？」

「会議室だけは止めてくれと教師共に泣きつかれたから、空き教室

の鍵を奪い取ってきた」

「ちなみにアイツは？」

「未だ行方不明」

「………たく何してんだよ、アイツ。

まあ、いいや。

類、今回の件で少し話さない？」

省吾の言葉にピクリと体を震わせると、類は荒んだ目を彼らに向けた。

「お前ら、関わらねえつつつたろ」

「事情が変わったんだよ」

包み隠そうともせずに、省吾は言いのけた。
そして静も続ける。

「あと、お前、今にも暴走しそうだしな」

「ほっとけ」

類はいくらか正気を取り戻しつつ、舌打ちと共に吐き捨てる様に言った。

「僕らが行動を変える程の事情、聞きたい？」

「ああ……俺も少し行動を変える事にしたしな」

「ふうん。……じゃ、とりあえず教室行こうか」

そう言つて校内へと入って行く省吾の背中を見て、類に怯えていた生徒達は思わず感嘆の息を洩らした。

終始笑みを保ち続け、なおかつ争いを起こすことなく類に対峙し続けたその姿に、龍神の安寧を確信する生徒達。

——たとえ現実がどうであれ今の彼らの姿こそが、その他生徒達にとっての情報源になっているのだ。

それを理解しているのかいないのか、省吾は変わらず笑みを保ちつつ、静が鍵を開けた教室へと踏み入る。

「ところで類、今まで何してたの？」

教室へと入ると直ぐに、手近な椅子にドサリと腰を降ろした類は、既に9割方の正気を取り戻していた。

「海里の家に行ってた」

“海里”と言った辺りでまた狂気がちらつくものの、再び正気を失う事は無かった。

それは省吾と静を見て、自分にはまだ味方が残っているのだと安心した所為かもしれない。

「どうだった？」

「もぬけの殻。」

んで、どうやらこの件には那美が関わっているらしい」

「それで“行動を変える事にした”、ね。」

「……それにしても、彼女が関わってる、ねえ？」

省吾が見た先で、静が深く頷く。

「……おそらくは」

「おい、一体何がどうなんだ？」

しかも俺、まだお前らの事情聞いてねえし」

「まあまあ、そんな苛立たないですよ。今からちゃんと説明するから。」

あと僕らの事情じゃなくて、僕らの行動を変えた事情だよ」
「んなもん、どっちでもいいだろうがよ」

至極面倒くさそうに、加えて苛立った面持ちになった類が大仰に返す。

「・・・まあ、いいけど。」

実はさ、海里の就職先ってすごい大手の企業なんだよね。おかしいと思わない？」

「全然。」

アイツの頭なら、その位余裕だろ」

即答してみせる類に、少々がっかりして省吾が続ける。

「実はそうでもないんだよ。」

企業が何を一番に見るのか、知ってる？

学歴だよ、学歴。

・・・この高校は伊達に瀬戸際を名乗ってないよ。

なんせ就職率0.5%の超不良学校だから。

分かる？1000人に5人受かるかどうかなんだよ？

しかも受かったとしても、下位の中小企業がせいぜい関の山」

「ちゅーしょーって何だ？」

「そこは置いといて、つまり何が言いたいかって言うと・・・

この学校から大企業への就職は、どう頑張っても無理って事」

「じゃあ、何で海里の奴・・・」

「そう、そこが問題なんだよ。」

・・・で、調べたら、随分と奇妙な事が出てきたんだよ」

「お前、それ裏の伝手使ったろ？」

「いやもう、手段とか細かい用語とか、そんな所はどうでもいいんだよっ！」

いい加減、話逸らすの止めてくれないかなあっ！」

すっかりいつもの調子を取り戻したらしい類に対して、額に青筋を浮かべつつ笑顔でキレるという器用な事をやってのけた省吾は、もうたくさんだとばかりに隣の静を見やる。

これは“お前が喋れや”という事だろうと解釈し、今度は静が話し始める。

「省吾が大企業の御曹司という事は既に知っているだろう？」

「んあ？ああ」

「先週辺りに企業経営陣同士のパーティがあつたらしくてな」

「・・・実態は、パーティを隠れ蓑みにした単なる情報収集戦争だけだね。

どいつもこいつも相手の弱点を聞き出そうと必死で・・・ほんと嫌になるよ」

「省吾、お前が話を逸らしてどうする。

・・・でだ、そこで奇怪な噂があつた様なのだ。

“何処かの企業では、ネズミを多用しているらしい”とな」

「ねずみ・・・？」

「詰まるところ、裏組織だ。

飼い主の意図に従順に動き、飼い主の利益を守る番犬だ。

賄賂わいろ、盗み、暴力・・・果ては人殺しに至るまで何でもやる。

ネズミなどという生易しい表現など適合せぬわ。」

「まあ、何となくは理解した。

・・・それで、それがどうしたんだ？」

「ピツタリと来ぬか？」

瀬戸際高校の生徒の大半が唯一にして持つ利点、それは実戦で鍛えられた腕っ節のみ。

ならば、それを使って番犬にでも仕立て上げてやろうと考える輩もおるやもしれぬ。

しかも海里は龍神の幹部であつたからな」

「・・・ああ、なるほどな。

つまり強い奴が必要だったと」

類はようやく納得したようで、しきりに顔を縦に振った。

それと対照的に、静の眉間は無数の縦皺で埋まる。

「今までの俺の説明は何だったのやら、と思う様なまとめだったが、まあいいだろう。」

呆れた様に、また諦めた様にそう言って——そして静は話を再開させる。

「ちなみに、ここまでの事は明治も知っている。

だが、今ヤツが何処にいるのかさっぱり分からん。」

「明治はどうでもいい。

・・・で、何故お前らが行動を変えたのか聞いていないんだが？」

振り続けていた頭をピタリと静止させ、類は怪訝そうに前の2人を見やる。

「僕ら龍神には、社会人をメンバーにしないという掟がある。

でも、向こうが僕らを取り込もうとしているとしたら・・・。」

「したら？」

類が続きを促す。

「僕らは龍神として、やるべき事をするよ。
だから、“ぶつ潰す”。
それが僕らの結論だよ」

一言一言をはつきりと告げ、省吾は口を閉じた。
それを聞いた類は、いつもの笑みを口元に浮かべる。

「覚悟は？」
「出来てるさ」
「出来ておる」
「良い返事だ」

3人は互いに見合うと、揃って笑みを浮かべた。
いつもの龍神だと、そう思えるような和やかな空気が彼らの間に流れた。

そんな雰囲気しばらく堪能し、静は再び話し始める。

「さつき類は、那美と海里の裏切りとが関わっておると言った」
「・・・ああ、そうだ。」

詳しい事は分からないが、そう確信している」

「ならば、こう考えると筋が通る。」

“那美は海里以前に、かの企業と関わりを持っている”」
「どんな関わりだ？」

「省吾の家の力を使っても何ら情報が出て来ぬ辺り、おそらくはネズミに所属する一味ではあるまいか？」

それ相応の身体的能力を有しておる事は、仮面女の件で明白である

しな」

疑問形だが、しかし確信を持って静が結論付けた。

静が口を閉じると同時に、誰かの手を叩く音が教室に響いた。

椅子に腰掛けていた3人がもしや那美では?!と慌てて音の聞こえた方を見れば、いつの間にやら教室の壁に背を預けて立つ明治が居た。

「いやあ、ご名答だナア」

緩んだ顔で、中腰のまま動きを止めた3人を面白そうに見やる。

「ご名答、だとっ?!

今まで行方をくらましおって!

・・・まさか貴様も裏切りおったか!!」

静は大喝して、表情を険しくする。

元々恐ろしい顔立ちだった所為もあるのだろう、今や彼の顔はまさに鬼と化していた。

いや、鬼の恐怖ですらも、今の彼には及ばないかもしれない。

そんな顔を向けられた相手は怯えを見せる事なく、あくまで飄々とした態度で3人と向き合い続けていた。

「嫌だナア。

俺、頑張ってコンタクト取って来たっていうの二・・・」

「コンタクト?」

「はい、期待通りの反応をどうもありがとウ。

省吾に聞いた後、すぐにその企業に行って、直接どうなってんのか

聞いて来たノ」

「お前、そんな・・・類みたいな事・・・」

「おい?!」

省吾が呆れて呟いた本音に、類は思わず突っ込みを入れる。

「最初の2日くらいは、すっげー門前払い食らってたんだけど・・・諦めずに行き続けてたら、偶然社長さんが通りかかってサア。

あっさりとバラしてくれちゃったんだよネ。

それで、ついでに会う約束もして来ちゃった」

それにしても赤い髪の子の男の人めちゃくちゃ格好良かったナア、と感慨深げに明治は続けて呟く。

明治の行動と、敵であるはずの相手の態度との両方にショックを受けつつ、省吾と静は固まった。

必死で情報を仕入れてきた自分達の努力は一体何だったというのか、と2人は揃って肩を落とす。

そんな2人の行動を類は理解できず、とりあえず話を進める事にした。

「そうか。じゃあ、その約束の日とやらの殴り込みに行くぞ」

「おう。」

俺もちよつとした用があるからナ。

そこは利害一致って事で、付いてってやるヨ」

「いつつもサボりまくっているお前が、自発的に行動なんて珍しいとは思ってたんだが・・・

そういう事だったのか？」

「そりゃナ。

やっぱり俺も人間だから、利己的なサ」

よく考えれば不穏な話を多く含んでいる明治の発言を、深く考える
事なく軽く流してしまう類。

それらを見て、省吾と静は思い至る。

今回の海里の件も、問題が起きる以前に伏線とか呼ばれるものが多
々あったりしたのだから、この類によって全て呆気なく流されて
きてしまったに違いない・・・と。

「僕、本当に龍神をやめなくなってきたよ」

「ああ、同感だ」

省吾と静は頭を抱え、再び項垂れるのであった。

—— 5章 堕ちる時1（後書き）

修正は更新しつつ、ちびちびとやる事にします。
気付かれなくたって泣かないぞ！

――墮ちる時2

「へえ・・・それで、どうしたの？」

「時間を調整できる日を、相手には告げておきましたよ」

「それって、いつ？」

「明後日です」

「くくっ・・・意地悪だね、律。」

そんな急じゃ、向こうも万全の準備が出来ないじゃないか」

「この中で誰よりも腹黒い貴方に、言われたくはありません。」

それに、貴方のスケジュールが繁雑すぎるのが悪いんです」

「言うようになつたねえ」

過去の情景を頭に思い浮かべながら、鎌はしみじみと呟く。

「・・・っ!!」

そんな事より、どうするつもりなんです？」

彼らに背を向けて執務机に座り、ブラブラと足をバタつかせている
那美に律は早口で問う。

隙あらば彼をからかおうとする鎌に、これ以上余計な事を口にさせ
ない為に。

「・・・甘い彼らの弱点を突くのは、楽しいんだけどね」

ぼうつと虚空に視線を漂わせながらポツリと零す那美の言葉に、彼
女の背後にいる二人は目を見開く。

彼女に気付かれない様にして互いに目を合わせ、再び那美へと視線
を戻す。

重い沈黙が占める中、鎌が口を開く。

「那美、やめるかい？」

「嫌」

鎌が問いかけた途端、那美はいつもの冷徹な光を目に宿し、彼に即答する。

そして腰掛けたまま上半身を捻り、自身の背後で椅子に腰掛けている鎌に不機嫌そうな顔を向ける。

「私は、やめない。」

兄さんこそ、やめると良いわ」

「嫌だよ。何たって、一蓮托生だからね」

何かを見極めるように目を細めて鎌を見た後、那美は執務机から床へ降り立つ。

鎌はくすりと笑って、彼女の動作を見守る。

「拗ねたかい？」

背後に掛けられた言葉を振り払うように、那美は社長室から出て行った。

もちろん、一般社員がくぐった事のない方のドアから――

「貴方や満の前では、まるで子供ですね」

ぱたんと扉が閉ざされたのを確認して、律が言う。

鎌は傍らに立つ男を楽しそうに見て、執務机に肘を寄せ、両手の指

を祈るような形で互いに組み合わせた。

そして組み合わせられた両手の甲に軽く自身の顎を乗せて、再び律を見やる。

「昔は、誰に対してもあんな態度だったよ。

我俤を言ったり、悪戯したり、どこにでもいる様な無邪気な子だった。

「……そういえば、律の前でも時々あんな感じになるよね」

「何故……」

戸惑う律に、鎌は口元の笑みはそのままにして眼光だけを尖らせて言う。

「私にそれを聞くのか？……——しゅくせい ふところがたな肅清の懷刀。」

あの子の身にあった事を、君も味わっているはずだ」

その言葉に顔を歪ませた律は、頭痛を堪えるかの様に額を右手で覆う。

垂れ下がったままの左手は、白くなるほど強く握り締められていた。

「いえ……同じとは言いません。」

彼女から話を聞いた訳でもありませんし、それに、那美は……
「……」

最も正確に言い表す事のできる単語を頭で探し、それが無いと知るや、律は何かを取り払う様に頭を振った。

「おそらく私の方がまだ軽い。」

あの時は、まだ序盤に過ぎませんでしたから」

「人の経験に優劣など付けるものではないよ、律。
それは本人にしか分からないものなのだから。」

「……そうでしたね」

「それに過去は消せない。

分かっているのに、あの子の過去を変えれたら、と考えてしまうんだ。

「……人間とは本当に愚かなモノだよ」

困ったように言う鎌に、律は緩く笑みを結ぶ。

「同じ様な過去を辿った所為か、私は那美に、時々自分と同じものを感じる時があります。

強気でいて、どこか臆病な所も。

嘲笑を向けながら、羨んでいたりする所も。

「……おそらく那美は、そう思ってくれる貴方に感謝していますよ。

貴方が似ているという私が言うのですから、間違いありません」

「そう……」

優しい律の言葉に、鎌はそつと笑った。

そして、くるりと椅子を半回転させ、オフィスの窓を通して空を仰ぐ。

瞬く星を見ながら、未来を想った。

「明後日は長くなりそうだな」

「那美の事です、決着のつけ方など当の昔に決めてあるでしょう」

「……そうだな」

願わくばその決着が彼女の新たな傷にならないモノであって欲しい、と鎌は思ったのであった。

「あ、那美だ」

「おう！やんちゃ姫が来たぞっ！」

「アズ、耳元で叫ばないで」

「迷惑」

「ひどっ！俺、普通の声で話してたっつーに！

つか、マサまで?!」

「地声がでかいのよ」

「違うないね。」

・・・で、那美？何でそんな不機嫌なの？」

ソファでわいわい騒ぐ仲間を尻目に満が、部屋に入ってきた那美に向かつて首を傾げた。

自分の感情を上手く隠してしまう那美の本音を、こんな風にあつさりと悟る事が出来るのは、おそらく満と鎌ぐらいなものだろう。現に、彼の仲間達は満の言葉に揃って首を傾げている。

——「いつもこいつも、“いつも通りじゃね？”と言いたげな表情で。」

「那美？」

もう一度満が呼ぶと、なんでもないと云って那美は首を横に振った。

「なあー姫さんよお。」

今回攻めて来るヤツって結局どんななんだ？」

アズと呼ばれていた男が、満に次いで那美へと声をかける。

金髪に碧眼と外見だけなら王子様のようだが、彼の内面はそれと掛け離れている事をこの場にいる誰もが知っていた。

「言うなれば、限られた閉鎖空間でしか優位に立てない奴ら、かしら？」

「ああ、“お山の大将”って事な。

・・・じゃあ、今回はそんなに楽しめないかあ」

那美の言葉に、アズはがつくりと肩を落とす。

「・・・そんな事もないと思うわよ」

「ほんとかつ？！」

がばりつと顔を上げて、喜色満面になるアズ。

すっかり有頂天になって隣の男にちよっかいを掛け始めるアズは、それに続く那美達の会話を聞いてはいなかった。

「ていうより、むしろアズは誰とでも楽しめると思うなあ」

「そうね。アズは敵さえいればそれでいいし。

ほんと、生まれる時代を間違えてきたとしか思えないわ」

「ああ・・・それ、凄くよく分かる。

アイアンメイデン
鉄の処女とか、嬉々として使ってたそう」

満は深く頷いた。

―と、那美と満に近づく者がいた。

真っ赤なパンツスーツを着込む茶髪茶目のフランス人形の様な女は、彼らの近くに来るや、ムツとした表情で話し始める。

「那美ちゃん、アレどうにかならない？」

そう言つて女は、未だに騒いでいるアズを指し示す。

「いつもの事でしょ？」

「そうなんだけど、もうそろそろ忍耐の限界なのよっ！
本当にいつもいつもいつもいつも……！！」

美しい顔を憎悪で満たし、ブツブツと不満を言い続ける女。

那美は、彼女の高い長身に合わせて顔を上向かせる。

「……もしかして、また食べられたの？」

その問いに、全ての体の動きをピタリと停止させ、女是那美に視線を合わせる。

数秒間互いに見合つた後、女の目からぶわつと涙が堰を切つたように溢れ出た。

「そうよっ！大阪まで行つて買つてきたのに！」

雑誌に“才能あるパティシエ、大阪に現る”^{きんぎょ}つて書いてあつたから、急遽^{きんぎょ}現地まで飛んで買つてきたのに！

それなのに、あの男っ！！

勝手に食べた上に、まあ普通だなんて！！

普通だなんて言つたのよ……っ！！」

那美の前の床にぺたんと座り込み、子供のように泣きじゃくる女。
その光景は非常に見目麗しく、どこか儚げな印象を見る者に与えて妖しく光る。

「……大変ね」

慰めようともしない薄情な那美の言葉に、女は更に声を上げて泣く。

「うおっ？リオ、何で泣いてんだ？！」

今更になってようやく気付いたのか、アズが駆け寄ってきた。
そんなアズの態度に、女の泣く声が突然止まる。

そしてやや危ない足取りで立ち上がった女は、アズへと飛び掛った。

彼女の手には、いつの間にやらサーベルナイフが握られている。

「お前の所為じゃああああああつ！！！」
綺麗な残響付きの叫び声が、響き渡った。

「…………アズは明後日のメンバーから除外ね」
「……………」

-
墮ちる時2（後書き）

↓<http://mypage.syo-setu.com/mypageblog/list/userid/41597/>

活動報告ページにて、会話集を始めました。

更新の度に、載せていく予定ですw

良かったら見てください

――墮ちる時3

「お兄ちゃん、さっきはごめんね？」

海里の頭に、ぐるぐると新しい包帯を巻きながら椎奈は言った。
この会社に留まると決めた途端に気を失った海里は、いつの間にか
ベッドの上に逆戻りしていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

忙しなく動く椎奈の腕を目で追いながら、海里は黙って首を横に振る。

そんな彼の反応に、椎奈は悲しそうに微笑む。

「やっぱり、昔と違うんだね。」

昔のお兄ちゃんはもっと喋ってたし、いつも冗談言ってた」

「・・・・・・・・それは・・・・」

昔、借金取りに追い回された所為で表情が乏しくなってしまった椎奈を、海里は常に笑わせようとしていた。

そして彼の出す、つまらない冗談に笑ってくれる椎奈に、海里自身も救われていたのだらう。

だが今は、冗談を言う必要も救われる必要もない。

兄妹で体験した事のない平和な時の流れに戸惑って、彼らは互いにどう接したらいいのか分からなくなったのだ。

それに加えて、互いを知らないブランクもある。

だから今彼らは、視線や会話によって相手を掴む糸口を必死に探している。

「うん、私もたぶん変わってると思う」

椎奈は頷いて、当たり前だよなと場を取り繕うように笑った。

「……………あれからの事、聞いていいか？」

「あれからって、お兄ちゃんと別れてから？」

海里が頷くのを見た椎奈は、複雑そうな表情になる。

「……………いや……………答えなくていい。

無神経だよな。

守れなかった癖に、一番辛かった時の事を聞きだそうとするなんて」
「ち、違うのっ！

私は、そんな！ただ……………」

慌てたように否定する椎奈を不思議そうに海里は見た。

「ただ？」

「私ね、ずっと守ってもらってたの。

最初はお兄ちゃんに、お兄ちゃんと別れてからはアノ人に」

「あの人？」

「ごめんなさい……………それは誰にも言わない約束なの。

だから私、辛くなんかなかった。

部屋に閉じ込められはしたけど、食べ物も貰えたし……………
それに暴力とかだって一度も受けたことはなかったの。

日課は、神様にお兄ちゃんを甦よみがえらせてってお願いする事と、時々部屋に来るアノ人を待つ事だった」

そつえば椎奈が最後に見た俺は血だらけだったなと思い出し、海

里は彼女の言葉に納得する。

あれは死んだと思われても仕方がない。

しかし、誘拐までしておいて何もされていないというのは、おかしい話だ。

海里は首を傾げつつ、椎奈に聞き返す。

「本当に・・・何もされなかったのか？」

「うん。何も」

椎奈は何故か悲しそうな顔になって答えた。

その表情を見て、海里は思い至る。

「・・・もしかして、あの人に守って貰ったというのは、そういう意味でだったのか？」

「アノ人は何も言わなかったよ。けど・・・」

「そうか・・・じゃあ那美とは何処で会ったんだ？」

「那美さ、じゃなくて那美と私が会ったのは、偶然。」

那美が乗り込んできた建物の中に、たまたま私が居たの」

“ 乗り込んだ ” というのは “ 殴り込んだ ” という意味だろうと、海里は勝手に脳内で変換する。

おそらく間違っではないだろう。

「そうか」

「うん、それから私はここに居るの。」

お兄ちゃん、死んじやったと思ってたし・・・帰る場所なんか、何処にもないと思ってたから」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「……………お兄ちゃん？」

「もうそろそろ、包帯はいいんじゃないかと思うんだが……………」

海里の声に従って、椎奈は自分の手元を見る。

そこには、大量の包帯に包まれミイラと化した海里の頭があつた。過去を思い出してボーっとしている間に、無意識で包帯を巻いてしまっていた様だ。

「あ、ああああああああ……っ！！！！
ごめんなさい！！！！」

——やっぱりアノ人の言う通りだった。

綺麗に包帯を巻き直された海里の無防備な寝顔を眺めつつ、椎奈は再び過去を振り返る。

「“隠した名前と具体的な名前を並べて話した時、それらと同等だと人は通常考えない”」

——そう、アノ人はそう言ったのだ。

椎奈は小さく呟いて、クスリと笑った。

「本当にアノ人……ううん、那美さんは凄いな」

暗闇に一筋の光が差し込んだ。

「那美、また電気付けてないの？」

満の声を受け、窓から覗く夜空を背景に何かがゴソリと動く。

「暗いのが好きなのはいいけど、目が悪くなるよ？」

「……………月があるわ」

「そんな屁理屈、誰が聞いても呆れるよ。」

しかもその角度じゃ、どう頑張っても月の光は届かないし。

自分の体で光を遮ってるよ。

……………で？何を讀んでるの？」

どんなに喧しく言^{やかま}ったって、強情な彼女は聞きやしない。

既にそう諦めていたとしても、彼女を心配している身の上としてはどうしても言いたくなるのだ。

ベッドが1つ置いてあるだけの部屋に満は踏み込み、窓下の壁に背を預けて床に座る那美に近づく。

「兄さんから奪った書類」

その答えの通り、彼女の手には“報告書”と題された厚みのある紙束が握られていた。

満はふうんと生返事を返しながら、彼女の隣に腰掛ける。

那美の顔に、いつも外で振りまいている様な笑顔はなかった。

それに幾分かホッとして、満は空中に視線を漂わせる。

「さっき、何であんな拗ねた顔してたの？」

「……………兄さんは関係ないのに」

そのポツリと零された那美の言葉は、彼女をよく知らない人からとつてみれば、問いと全く関係のない話に聞こえただろう。

しかし、相手は満である。

彼は良くも悪くも、那美という人物をよく知っていた。

「きつと何か那美にしてあげたいんだと思う。

その思いが、今の社長を動かしてるんだと思うよ。

「………迷惑？」

「逆よ。おかげでかなり物事が進めやすいわ。

でも、だからこそ私はあまり兄さんに関わって欲しくないの」

「………ああ、そっか」

唐突にそう呟くと、満は声を上げて笑い出した。

それは彼の年相応の笑い方で、とても楽しそうだ。

対し、隣に座る那美の顔は怪訝そうに歪んでいる。

「何よ」

「誤解されたくないんでしょ？」

手段として社長を利用してるって。

馬鹿だなあ……社長がそんな事を思うはずなのに」

満は悪戯つ子みたく笑って、那美の頭を撫でる。

その光景はまるで、彼らの歳が逆転してしまったかのようだ。

「社長は、上辺だけしか見ない奴とは違うでしょ？」

腐っても那美の兄なんだし。

那美が嫌がっても、あの人はきつと何処までも付いてくるよ」

「それは……気持ち悪いわね」

那美はそう言って笑った。

それは、いつも彼女が浮かべる様な隙のない表情ではなく、見る者を安心させる様な笑顔だった。

「類、来た？」

その問いに、きょとした顔で類は首を傾げる。

敵陣への突入を明日に控えたその日の朝、類は学校に着くと省吾に連行された。

連れて来られた場所は人気の少ない廊下、そこで開口一番に告げられたのが冒頭の質問であった。

「何が？」

緊張感のない顔で聞き返してくる類に、省吾は顔を顰め、そして分かりやすくして質問を繰り返す。

「敵からの招待状、来た？」

「郵便物って、朝から見るもんか？」

「あのさぁ・・・それワザと？」

「何が」

「さっきから質問を質問で返してばかりっ！」

イライラするんだよね！

とりあえず今は、来たか、来てないか、それとも見てないか。それだけ答えてくれるかな！！」

「あー！ー！見てねえ」

類は後頭部をガリガリと掻きながら言った。

ようやく出てきた、知りたかった答えに省吾は頷く。

「僕ら3人には届いているから、たぶん類にも届いてるよ。」

帰ったら、郵便物を確認して」

「・・・・・・結局、何の話だ？」

「敵からの招待状だよ。」

夜の8時にどうぞって書かれた赤い手紙。

まるで戦時中の召集令状みたいな・・・・・・ホント、むかつく！

・・・・・・で、どうするのさ？」

「しょうしゅ？」

・・・・・・まあ、いいか」

省吾の発言を途中から理解出来なかった類であるが、最初と最後はどうにか聞き取れた様で、聞けなかった所は流す事にしたい。

「書かれた時間の前に行つて、相手が油断してる所を叩く？」

「いんや。」

その時間・・・・いや、それより遅いぐらいで乗り込んでやろうぜ」

即答する類を、目を見開いて見やる省吾。

「で、でも相手はプロだよ?!」

「向こうの準備が完全な時に叩き潰した方が、相手もへこむだろ？」

そんな所に関してだけ何で頭使うかなと省吾はしばし呆れ、そして困ったような笑顔を浮かべる。

「そういう類の真っ直ぐな所、僕は嫌いじゃないけどね」
「おうよ」

褒められた、と類は偉そうに胸を張る。

だが、そこで省吾の表情が一気に曇った。

「でも……………」

「ん？」

「何でもないよ」

不思議そうな視線を寄越す類に省吾は慌てて笑顔を取り繕うと、また明日と言ってその場を離れる。

——でも今回は類のそういう所が、僕らを敗北へと導くかもしれない……………」

類に背を向けた省吾の顔は、恐ろしく無表情だった。

―― 墮ちる時4

「またここに来たね」

「ああ」

「あれ、2人は2回目なんだ？」

俺は9回目なんだよネー」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あ、類はやっぱ初めて力。

どう？初の社会人の敵を前にしテ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・行くぞ」

明治のからかい混じりの問いを無視して、類は足を踏み出し、正面の扉を潜くって行く。

その後を追うようにして、3人の青年も目の前の巨大ビルへと飲み込まれていった。

――この時、時計の短針は9時過ぎを指していた。

一歩踏み入れたそこには、静けさに包まれた大きな空間が広がっていた。

黒色タイルが所狭しと敷き詰められた床を歩く度に、甲高い靴音が辺りに響く。

今入って来た正面玄関の対極の壁には受付案内らしき空間があり、そこに腰掛ける1人の美女がこちらを興味深げに見ている。

類達が近寄ると、美女は洗練された所作ですくりと立ち上がり、続けて深く頭を垂れた。

「お待ちしておりました。
片山様、北村様、飯塚様、綾崎様で間違いはございませんでしょうか？」

一目で社交的と分かる、それでいて相手に不快感を与えないという絶妙なバランスを保った笑みで対応する美女の言葉に、4人は内心で動揺しつつも頷いた。

「ようこそ立花株式会社へ。」

私は、当社社員の高岡理央と申します。

これから皆様をご案内しますので、どうか逸れないようにお願い致します」

美女は案内所のカウンターを回り込んで、突っ立っている彼らの元へ近寄ると、どうぞこちらへと言って歩き始める。
類を始めとする4人は揃って、彼女の後に続く。

「何処へ連れていく気だ？」

年上を相手にしているのにも関わらず、敬語を使うことなく類はぶつきらばうに訊ねた。

それに機嫌を損ねた様子もなく、美女はあくまで大人の対応を貫き通す。

「わが社社員、銚茸のご友人との事でしたので、社長が直接会いたいと申しておりました。」

今からお連れするのは、社長室でございます」

「ふんっ、高校生無勢に待遇が良すぎるんじゃない？」

省吾が鼻で笑って、美女の言葉を退けた。

それに対して笑みを深めると、彼女は緩く首を横に振った。
そして後ろの方に居た明治に視線を送ると、若干言いくそうに言葉
を紡ぐ。

「あちらの方が気に入ったのだと・・・」

彼女のその言葉に、明治が笑う。

「おおつ、じゃあ俺のおかげって事だね」

軽い明治の言葉に省吾と静が深くため息を吐いた。

——その時、

「・・・じゃねえっ」

ポツリと、今まで黙っていた類が呟いた。

「類？」

静が怪訝そうに聞き返す。

「ふっざけんじゃねえっ！！！」

「つきや！」

大声でそう怒鳴った類は、いきなり美女に対して拳を振り上げた。
突拍子もない類の行動に、省吾と静が慌てて彼を羽交い絞めにして
拘束する。

美女は、すんでのところで明治によって突き飛ばされ、床に尻餅を
つく。

「ちよつと類、何してんの！」

「お前っ！海里は無理やりお前らに連れて来られたんだ！それを白々しくよくもっ！！！」

社員だと？！

ふざけんなっ！！！！

どうせお前らは今もアイツを閉じ込めてるんだろっ！」

省吾と静の枷を外そうと暴れながら、床で怯える美女に詰め寄る類。

「ちよつと、類っ！」

彼女が悪いんじゃないでしょ！

キレたいのは分かるけど、相手が違っつて！！！」

省吾が怒鳴ると、類は舌打ちして暴れるのを止める。

後に残ったのは、嫌な空気と嗚咽を漏らして蹲る美女だった。類は両腕を奮って省吾と静の腕を外し、顔を苦しげに歪めた。

泣いている女は、ただの案内係。

完全に畑違いの人間であつて事情など何も知らないだろう事を、類はこの時になつてようやく理解したのだった。

そんな非常に気まずい空間を打ち破ったのは誰であろう、明治だ。

彼は軽やかな足取りで座り込む美女の元へ歩み寄ると、ニヤニヤと笑いながらいつもと変わらないトーンで話しかける。

「おねーさん、ここからは俺らだけで行くヨ。

どうやって行けばいいノ？」

「しかしっ・・・それでは私の仕事が！」

自分の仕事を思い出したのか、溜めた涙を散らせて慌てて明治を見

上げる。

美女の涙に微塵も心を動かされる事なく、にやけた笑顔のまま話を続ける明治。

「大丈夫大丈夫、俺が社長にお願いしとくつて。知ってると思うけど、一応面識あるシ？ぶっちゃけアンタも気まずいでシヨ？」

まさに図星だったのか、彼女はそろりと視線を逸らせた。だがすぐに首を横に振って立ち上がり、表情を引き締めて再び歩き始める。

「これは私の仕事です」

そう言った彼女の顔には、最初にあつた余裕のある笑顔など微塵も残ってはいなかった。

軽いノック音の数秒後、ゆっくりとそのドアは開かれた。

「待っていたよ」

10年来の親友に対する様な柔らかい笑みを浮かべた優男が、ドアの真向かいにある執務机に腰掛けていた。

彼の傍には、彼を呆れた表情で見ている赤髪の男が屹立している。そんな室内の光景に類の背後から、あれ？という声上がる。

振り向けば、片足を部屋内に突っ込んだままの状態で立ち止まり、首を傾げる明治の姿がそこにあつた。

「気軽に了承してくれたから、てっきり赤い奴を社長だと思ってた
あらら」と言いながら後頭部を片手で掻く明治だったが、彼の表情
に謝罪の感情は一寸も見られない。

「別に構わないよ。

そんな事はどうでもいいから、とりあえず入ってくれないかな？」

くすりと笑んで、執務机の男が言った。

明治は、園児がするような元気の良い返事を返して室内へ滑り込む。
しばらくして、ガチャリというドアの閉まる音がした。

「……海里はどこだ」

ドアが閉まると分かるや否や、類が怒りを滲ませた低い声を発する。
それに男は笑みを深めると、隣に立つ赤髪の男に目で合図を送る。
無言のメッセージを受け取った男は1度頷き、類に視線を送る。

「初めまして。

こちらは社長の長島鎌。

私は社長秘書をしております、立花律です。

お見知りおきを」

仲良くなさるものかといった態度で類は彼らを見返し、再び口を
開く。

「類はどこだ。

お前らが連れていったんだろう？」

そんな類の言葉に、律は鼻で笑う。

「おやおや・・・何か勘違いをなされている様だ」

「勘違いなんかじゃねえっ！」

俺は、お前らが海里を引つ張ってった事を知ってたんだ！
現場にいたんだ！」

あまりの怒り故か、自分を主張する小学生の様なたどたどしい言葉
が類の口から飛び出た。

それすらもせせら笑って、律は鎌を振り返る。
鎌もしようがないなと笑って肩を竦めた。

「なに余裕こいてんだ！クソ野郎っ！」

とうとうキレた類はダツと走り出し、律の胸倉を掴もうと彼に肉迫
する。

あと数センチで彼の首元に手が届くという時点にも拘わらず、未だ
棒立ちの律を見て勝利を確信する類。

自分でも気づかぬ間に笑みを浮かべ、心中では目の前の一般人に対
する表面的な謝罪を紡ぐ。

・・・——ドサツ

そんな音がした次の瞬間に、類が見たのは天井だった。

背負い投げの要領でひっくり返されたのだと理解するのに、少しば
かり時間を要する。

自分の体を押さえつける男を見上げれば、馬鹿にした様な笑みがそ
こに広がる。

「その様な鈍^{のろ}さで、よくも私に向かってきたものです」

「高校生にそこまで求めるのは、やりすぎじゃないかい？」

口元を押さえて笑いを堪える鎌が律の言葉に反応する。

「……まあ、でも嫌いじゃないよ。」

思いつきりの良い子は見えていて爽快だしね」

更にそんな言葉を付け足して、鎌は笑いをおさめる。

「貴方は……鼠の方だったんだね」

床の上で啞然としている類の体を押さえている律を見て、省吾が目を細める。

彼の言葉に律は、眉間に皺を寄せて拗ねた表情を見せる。

「その表現は気に入りません」

「ははっ、そんな風に言われているのですか？

これは面白い事を聞いた。

……となれば、少々あれへの態度を変えなきゃいけないね。

ああ、律、そろそろ離して差し上げなさい。

腐っても、それは我が社のお客様なのだから」

「はい」

多分に毒を含んだ鎌の言葉に、明治以外の龍神の面々は拳を握り締めて堪えた。

律が立ち上がると、類はハッとして飛び上がる。

「くそっ……!!」

「喧嘩は相手を見てしなければ、命を落としますよ」

「律、あんまり挑発すると、後で大変だよ？」

と素人の見境の無い抵抗は、時々予想外な結果を生み出すからねえ」

律の発言を諷めておきながら、その上をいく挑発をしてみせる鎌の方がよっぽど性質が悪い。

そんな彼を傍目に見、律は相手に気付かれぬ程度の溜息を吐いた。常に紳士的な態度の鎌は、自身の妹に関わる者にだけ毒の孕んだ牙を向く。

今回、その特異性は遺憾なく発揮されている様だ。

「どうやらお客様の準備は既に整っているようだね。

・・・律、案内して差し上げなさい」

「はい」

——彼の毒牙から、逃げられた者はいない・・・

律は殺気立っている若者達を見て、そっと口の端を上げた。

-
墮ちる時4（後書き）

今月はほとんど更新できないと思います。
すいません・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5945h/>

最強女子高生

2010年10月10日00時40分発行